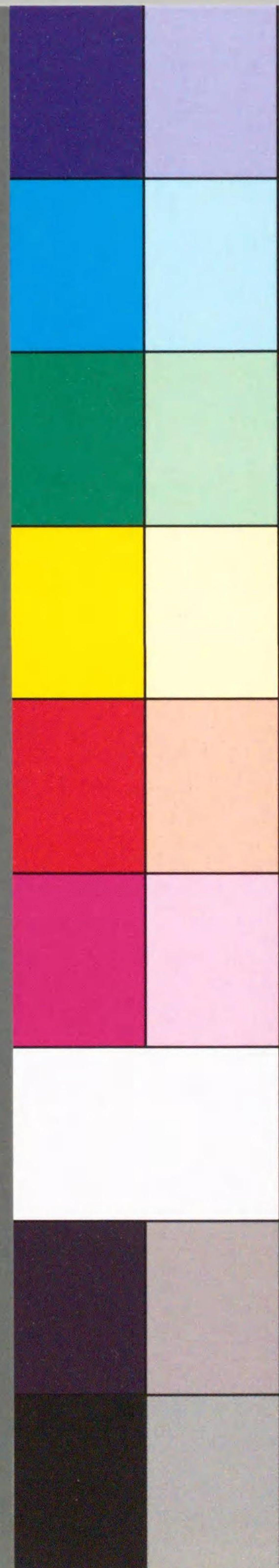


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



13

935

特13-935



1200500780484

御殿桜

国立国会図書館







少女小説  
御殿

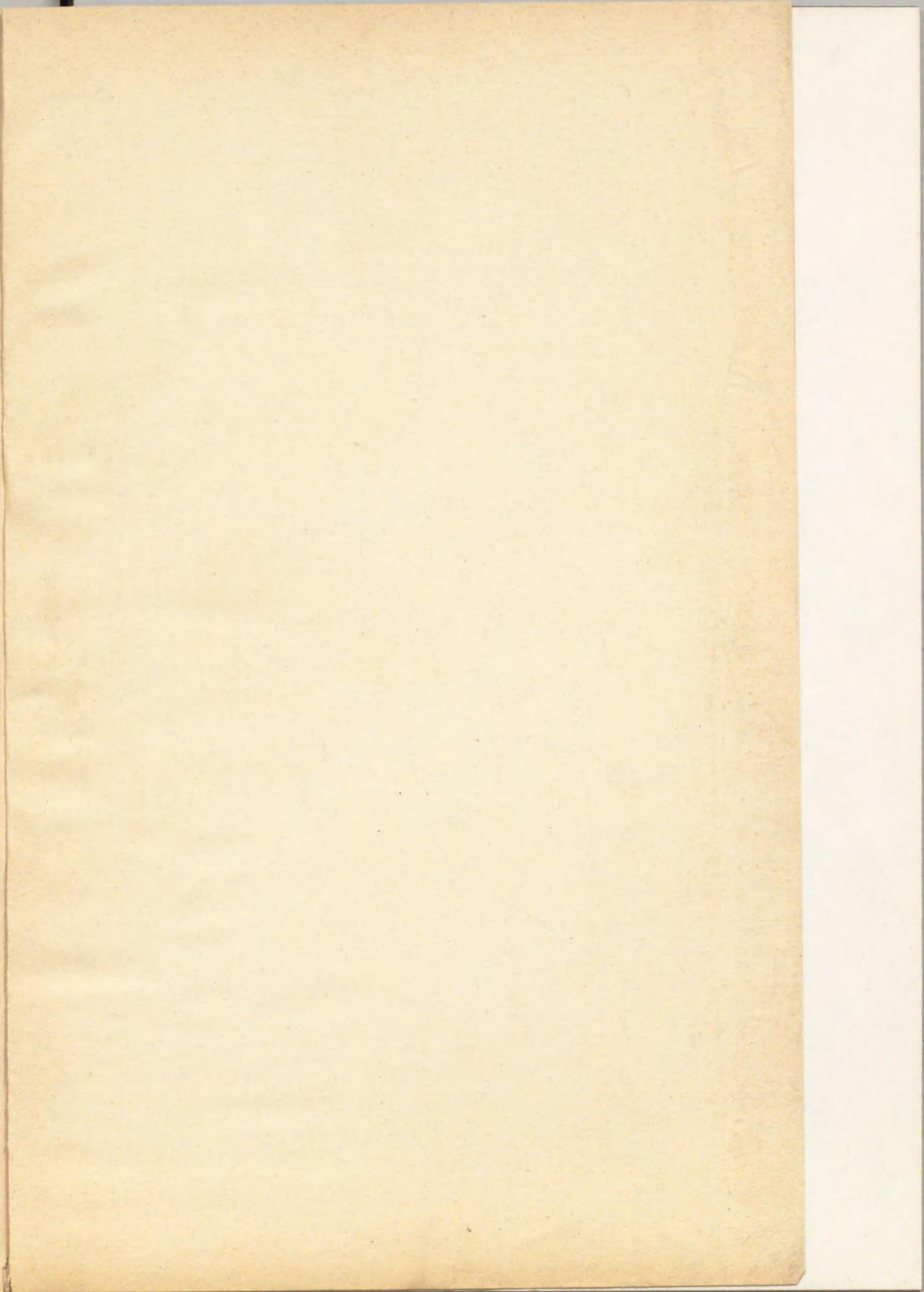
かゝる



特 13  
935

尾島華子







特13  
935



少女小説 御殿櫻

尾島菊子

品川は御殿山の徳丸邸では、今日其廣い庭内に於て盛んなる園遊

會を開かれました。午前十時よりといふのが、九時半頃から最うば

つゝお客様で、十一時九分までには流石に廣々とした邸内も人で

満員になりました。彼岸は濟んで、櫻の花はもう四五日で満開とい

ふ頃は四月の初旬、麗朗に晴れ渡つた空には、吹く風柔かに半開き

の花の香を送つて、花のやうに着飾つたお嬢様達の振袖にそよ

と靡いて居ります。  
「あら、蓮子さんぢやなくつて？ 彼處の池の端にお母様らしい方と





お二人で立つて被居るの？」

「はあ然うよ、蓮子さんに違ひないわ、行つて見ませう。」

お稻荷様の祠の前の大きな若楓の木蔭に遊んでゐたマガレットの令嬢は二人、いそぐと手を携いて池の方へ走りました。

「蓮子さん 御機嫌よう」

と後へ立つて、先づ藤色の紋羽二重の一人は、目の覚めるやうな裾模様ある紫縮緬の肩に手をかける。

「久らくねえ！」

と友禪縮緬の一人は、横から小さい手を握りました。

「あら、千枝子さん、まあ愛子さんも入らしつて、ほゝゝゝいやよ驚かして……びつくりしたわ。」

お下げの蓮子さんは振向いて嬉しさうに莞爾する。

「お母様、學習院のお友達よ！」

「あゝ然うかへ、オヤマあお揃ひ遊ばしてお綺麗で被居ること、毎度蓮子がお世話様になりました有難うございます。」

と丸髻の美しいお母様は一寸會釋して二人に被仰る。

「私こそ……」

四つの長い袂は地上に落ちて、愛らしく一緒に頭を下げました。

「お母様、私皆さんと御一緒に遊んでゐますわ。」

「それぢやね、母様は休憩所の方へ行つて居りますから、皆さんお氣をつけてお遊びなさいな。」

とお母様は三人を心地好げに眺めながら、お納戸色の裾を捌いて橋をお渡りになる。三人はずらりと手を携き合つて、

「今日は眞實に嬉しいことね、皆さんと此様に御一緒に……」



「私も嬉しくつて爲様がないわ。」  
 「全くよ。」

と喜び勇んで橋の中程まで来ると、偶と言ひ合はしたやうに立停まつて池の中を見ました。藍色の水が底に溜つて、所々に若根の蓮がちよい／＼見えます。其上に櫻の花片がちらく／＼零れて、池に姿を映した大きな櫻樹は最も美事に開いて、佳い匂ひを放つて居ります。岸邊の杜若も來月になつたら、白や紫など取り／＼に咲いてお目に懸けますよ、と云つた風に細長い葉をすい／＼並べて居ります。

「そりや然うと、雛江さんは何うしてお見えにならないのでせう？」  
 と愛子さんが云ひ出しますと、

「私もね、先刻から餘程氣を注げてゐますけれどお見え遊ばさない

のよ、變だわね。」

「全く變よ、若しかすると御病氣か知ら。」

「あら、そんな事ないと思ふわ、昨日まで學校に入らしつたんですもの、それとも御入院遊ばして彼居るお母様が、急にお悪くでもお成りになつたんぢやないでせうか？」

「さあ、然うね……」愛子さんは少時考へて、

「何しろ出て被居らない處を見ると、屹度何うか遊ばしたのよ。」

と云ふ。

「能く學習院へお供して來る春やに訊くと解るわ。」

「然うね、春やは何處に居るでせう……お居間のお縁側の方へ廻つて見ませうか。」

「でも失禮だわ、雛江さんのお居間は彼間の天幕の裏の方ですもの。」



と蓮子さんは赤褌をかけて島田に結つた粹な女が出たり入つたりしてゐる、大きな天幕を指さします。」

「然う、あの奥なの、雛江さんのお家は眞實にお立派だわね。」

千枝子さんはさも感心したやうに、廣々とした境内を見廻してゐます。」

「お父様はお豪いんですもの。」

と蓮子さんは一寸小鼻を動かす。

「でも家のお母様は然う彼仰つてよ。徳丸様は少し投機的がおありなさるつて、家のお父様だつて後日屹度彼位の身代にやお成りなさるつて、始終さう彼仰つてよ。」

愛子さんは餘り性質が善くない方たものですから、嫉妬がましく此様事を申しました。」

「やまけつて何あに？」

と後の二人は可愛い眼を睜ると、

「何だか知らないけれど、何方にしても好いとぢやないのよ。」

「そんな事ないわ。」

二人は一緒に然う云つて手を携きました。そして、「彼方へ行きませう。」と嫌な顔して歩き出す。嫌はれたを悟つて狡猾い愛子さんは直ぐ二人に捉まつて

「雛江さんに此様こと被仰しつちやいやよ。」

と自分から手を握つて三人列なるのでした。橋の袂のだらく坂を下ると、

「イヨーお雛様のお揃ひ！」

とシルクハットの酔拂つた叔父様が二人、赤い顔して面白さうに



囃す。三人はクツク笑ひました。團子やの露店に丸鬚と庇髪の奥様が二人、腰を掛けて被居ると、何處かの叔父様が傍へ行つてついと奥様の櫻餅を奪つて食べる。愛子さんはそれを見てゐて、ふつと噴き出しました。大椿の樹の下へ來ると、向ふから噂の主の雛江さんがお附きの春やに手を携かれて、此方へ歩いて來るのが見えます。其後に九つになる弟の晋ちゃん、海軍の服を着て附いて居ります。雛江さんは大きな矢がすりのお召に、赤地繻珍の丸帯を立矢の字に背負つてをります。

「あら、雛江さんか入らしつてよ。」

「さうね、ちよいと泣いて被居るんらやなくつて？」

「然うらしいわ、何う遊ばしたんでせう？」

と蓮子さんは逸早く馳け寄つて、

「雛江さん御機嫌よう、今日は何うも有難う！」と挨拶して、「何う遊ばして？ お腹でも痛くつて？」

と少し屈んで、可愛い眼で下から覗く。

「御機嫌よう！」

僅に眞白の手を伸して、

「早くお目に懸らなくつちやならないのを濟まなかつてね、御免なさい蓮子さん！」

と固う手を握るのでした。

「心配してたのよ、皆さんがね、御病氣ぢやないか知らと、被仰るんですもの、眞實にお腹がお痛かつたの？」

「いゝえ、然うぢやないのよ。」と強ひて笑つて、「蓮子さん、そんなに心配して被下つて？」



御 殿 櫻



少 女 小 説

「え。」  
 其處へ後の二人も駈けつけて、  
 「雛江さん、今日は有難う！」  
 と嬉しさうにお叩頭する。  
 「能く入らして被  
 下つてね。」  
 雛江さんは今に  
 も涙が零れさうな  
 眼に、苦しげの愛  
 嬌を浮べますと、  
 晋ちやんも、  
 「御機嫌よう！」





と活潑に愛らしく挨拶を致しました。

「オ、大層お揃ひ遊ばしたこと、さ、お嬢様、皆様と面白くお遊  
びあそばせ。」

と春やは慰め顔に莞爾すると、

「私、皆さんと遊んでるから、お前彼方へ行つてゐても好いわ。」

「左様でございますか、それでは皆様お壽司やへでもお汁粉やへで  
も御自由にお入り遊ばしてね、澤山召食りませよ、ほ、ほ、ほ。」

と賑かに笑つて、

「ではお嬢様、先刻の事はお解りになりましたね、もう決してお泣  
き遊ばすんぢやございませんよ、宜しうございますか。」

肩へ手を廻して頬摺りせんばかりに云ひます。雛江さんは優しく  
頷いて。

「あ、もう泣かないわ。」

春やが母屋の方へ行きますと、五人連になつてぶら／＼と庭の内  
を遊んで居りました。

折から餘興の大神樂が始まるのでせう、太鼓の音が賑かに響いて参  
りました。

楽しさうな皆様の顔色に引變へて、雛江さんばかりは矢張り打洗  
んで、人知れず深い溜息を吐いて居りました。

二

實業界の大立物として、今世間に其名を知られて被居る雛江さん  
のお父様は、年の頃四十二三のでつぶり肥つた大きなお方でござい  
ます。何でも御自分一人でお作りになつた身代ださうで、邸宅の立  
派なとは大したものので、花崗石の御門は厳めしく聳え立つて居りま



す。  
お母様は水野子爵家の令嬢で年は三十五六、それはくお品の好  
い優しいお方でございますが、お父様がだんく盛んにお成りにな  
るにつれて、善くない人達が入りしましてはお父様を欺しますの  
で、お母様はそれを苦に病んで始終ぶらく患らひ勝ちで被居いま  
した。處が今年の正月、一寸お風をお引きになつたのが源で、咳が  
止まりませんでした。肋膜炎になつて何うしても熱が下らないも  
のですから、遂に東京病院へ御入院なさいましたのです。  
雛江さんと晋ちゃん毎日學校の歸りがけに、病院を見舞ふ事を  
楽しみにして居りました。そして日曜には毎時も態々出かけて行く  
のでございます。お母様は可愛い我子の顔を見るのが嬉しくて、そ  
ればかりお待ちになつております。處が今日も朝の中に行つて來よ

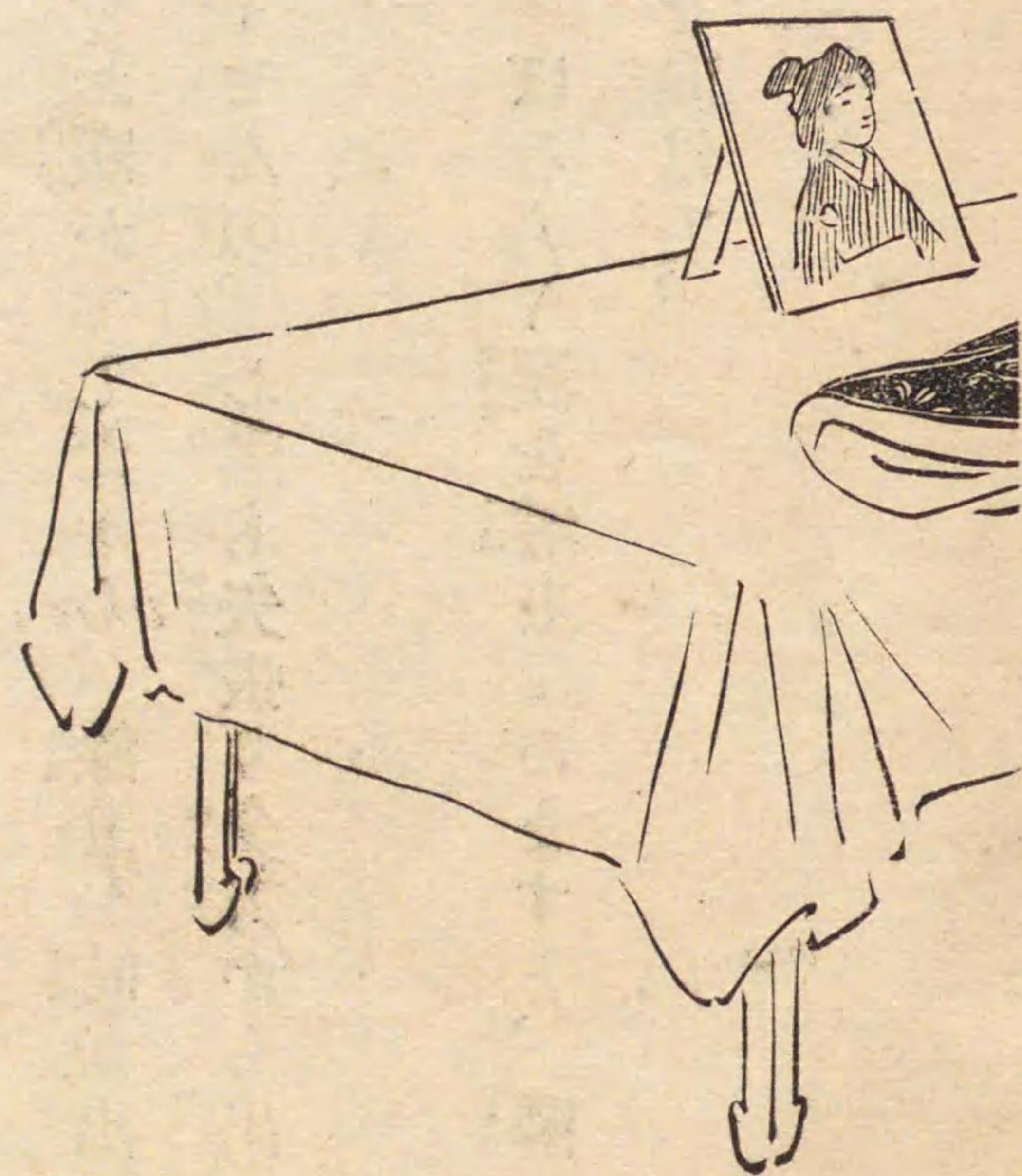
うと思ひますと。お父様は、  
「今日は園遊會で混雜してるのだからお休みにおし。」  
と被仰いました。さあそれから雛江さんは泣き出して了つたので  
す。第一お母様が御入院遊ばして被居るのに、面白さうに園遊會を  
催すといふ、それが既に雛江さんの快くない處でありました。お加  
之にお見舞に行く事すらお許し下さらなかつたを甚く怨んで、お  
父様は不人情だと思ひました。で、獨り居間に籠つて泣いて居りま  
したが、だんく時間が迫つて参りますし、お友達や何か大勢お出  
でになつてゐますから、さうく引込んでる譯にも行きませんし、  
春やに慰められてやうく庭へ出たのでした。  
友達と遊びながらも、お母様の事が心配になつて、今日は嘸お待  
ちになつただらう、と思ふと、もう無暗に逢ひ度なつて堪らないの



でした。  
春の日は何時か暮  
れて、庭の櫻に夕風  
涼しき黄昏頃、今日  
の園遊會も散會して  
馬車や車、中には自  
動車などを驅つて、  
意氣揚々とお客様が  
お歸りになると、一  
頻り轟と重い車輪の  
音が砂利の上を軋つ  
て出ました。跡は寂



然として華かな電燈が邸宅の  
内外を照らして居ります。  
雛江さんは淋しさうに居間  
へ入いて、晋ちゃん二人机  
に向ひながらも、今頃は如何  
にお母様が落膽して被居るだ  
らう、と其お顔が眼に見える  
やうで、太息を吐いては寫眞  
立に挟んで机の上に置いてあるお母様の姿に向ひ、  
「お母様、何卒お許し遊ばして頂戴、お父様がね、一日位行がなく  
つても別に變つたことはないから、今日は止せと被仰るんですもの、  
私ね、今日の園遊會にお母様も被居つたら如何に嬉しいだらうと思





つてよ、餘興が面白いたつて、お客様が澤山入らしたつて、お母様が彼の冷たい……寂然とした病院の寢臺の上にお臥つて、私等をお待ちになつてるかと思ふと、私悲しくなつて些とも面白くなかつたわ。それよりかお母様のお傍へ行きたくつて、今も一人て泣でいるますの、晋ちやんもね、何故件れて行つて呉れないつて、今朝一度泣きましたわ。今日は大分お暖かでしたから、餘りお咳が出ませんでしたが、然うでもありませんの、お熱も矢張り夕方から出ましたか、さう、不可ないわね。」

獨り心の中で此様を云つて、ぼろ／＼涙を零してゐますと、隣りのお机から晋ちやんが丸い眼を向けて、

「姉さん、何泣いてるの？」と訊く。

「泣かないわ。」

大急ぎ涙を拭いて恍ける。

「だつて今本の上へ涙が落ちたよ、ほら、此様に濡れてるんだもの……」

と、ぼろりと落ちた涙の迹を指さします。

「今、欠伸したもんだから涙が出たのよ、今日は眞實に疲れたわね、晋ちやんも疲れたでせう、お神樂が面白かつて？」

「餘り面白くもないや、姉さんがお母様の許へ件れて行つて呉れないんだもの……」

と一寸膨れた眞似する。

「だつて、お父様が止せと被仰つたからよ。其代り明日は朝出がけに行きませうね。」

「眞實！」



と眼をくるく／＼させて、

「学校の時間が遅れないの？」

「だから成るだけ早く起きませうよ。」

「あゝ。」

と勇んで、「ちや、今夜は早く寐ようね。」

と手早く本を片付け初めます。

「ほゝゝゝ、晋ちゃんは現金たわね、今夜は未だ早いのよ。」

罪のない弟の顔を見て可愛氣に頭を撫でながら、雛江さんは笑ひました。

「姉さんは又眠がつて此様眼をするよ。」

と眼を細めて見せて笑ふ。

「偽よ、晋ちゃんこそお母様が被居りもしないのに、お母さん！

なんて呼ぶ癖に。」

「偽だい。」

此様とを話してゐる處へ、後の襖が靜かに開いて、

「お嬢様、且那樣がお召してございますから、さあお出で遊ばせ。」

と春やが顔を出しました。

「さう、何御用だらう！」

雛江さんはハツと氣が注ぎました。若しや今朝の泣顔をお父様に  
見られたのではあるまいか？ さう思ふとぶる／＼と凜へました。

春やもそれと察してか、

「お嬢様、且那樣か若し今朝の事を被仰いましたらお謝罪り遊ばし

てね、宜しうございますか。」

雛江さんの聲は曇つて、



「お父様は御機嫌がお悪いの？」  
 「いゝえ、然うでもございませぬやうですか、あの大層お酔ひ遊ばして被仰いますから。」

「さう、怖いわね。」

二人はつる／＼した長い廊下を通つて螺旋階の下まで來ると、雛

江さんは急に足が重くなつて、段を上るのが恐ろしくなりました。

お父様のお部屋から女中部屋へ頻りと電鈴が鳴つてをります。

「さ、お手をお携き申しませう。」

と春やは先に立つて手を出す。雛江さんは手を引張られてやうや

う上り切ると、

「私、お父様とお話してゐる間、お前ね傍に居てお呉れな。」

と頼みました。

お父様のお部屋は今お客様がお歸りになつたらしく、秋といふ女中がお茶盆などを片附けて居りました。

「雛江か、此處へお出で！」

と赤いお顔をして悠然と臂つきに凭れて被居る。

「ハイ。」

恐る／＼向ひ合つて座りますと、春やが後に扣へて如何お話が出るかと、心配らしく眼をきよと／＼させて居ります。

「お前、彼方へ行つて可い！」

とお父様は春の方へ顎をお向けなさる。詮方なしに春やは室を出ましたが、何うも氣に懸つて堪りませぬ、で、窺とお次の間に蹲踞んで居りました。

「お前は何故今朝泣いてゐたか？」



果して出ました。血走つた眼は据つて底光りに光ります。

「……………」

「今日のやうにお客の澤山ある日に、何

うしてお前は人に涙

を見せたか？」

聲は低いけれども

何處となく重味があ

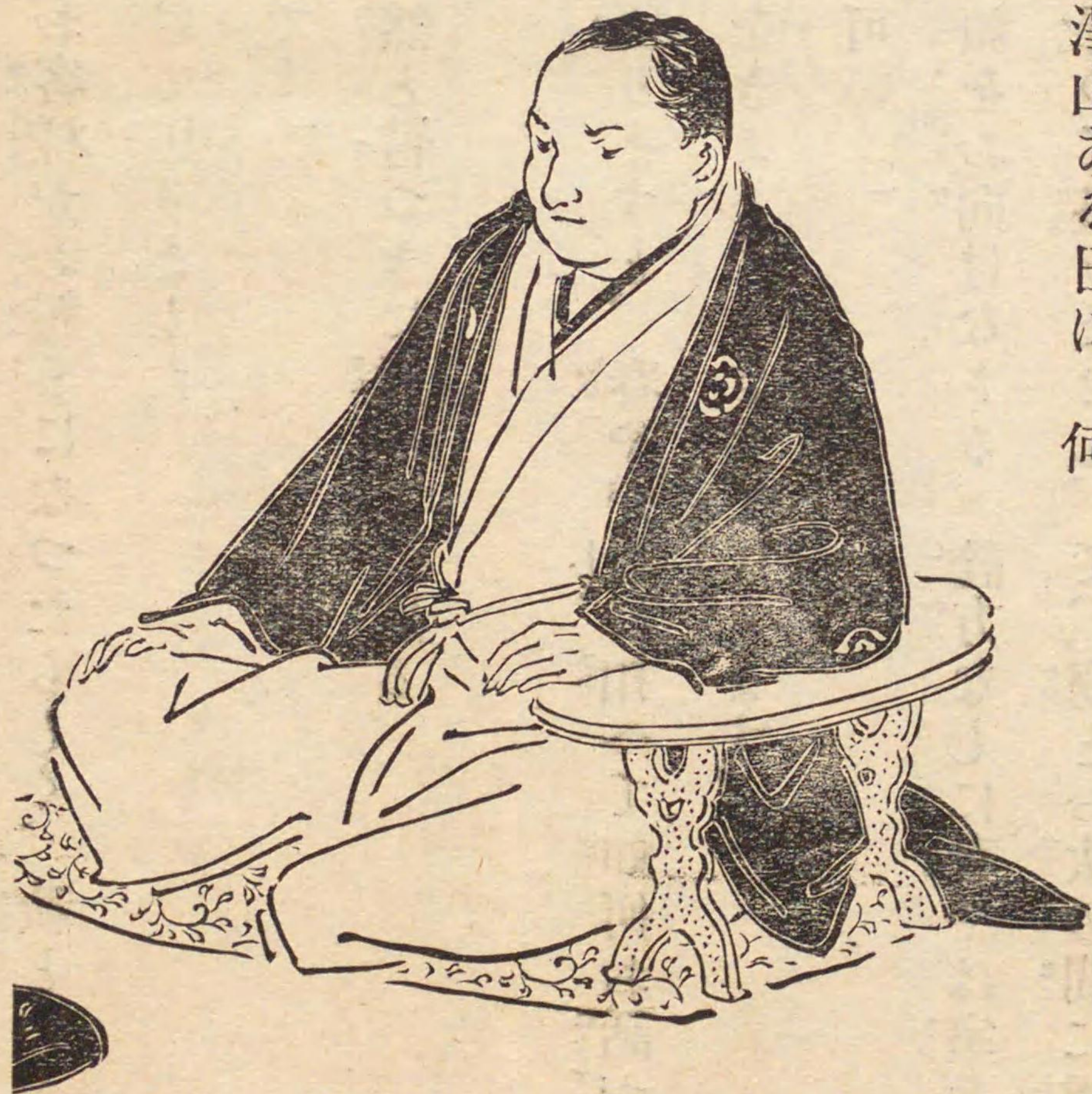
つて、靜かに館に反

響します。

雛江さんは何時の

間にか首垂れて了ひ

ました。



「今日はお母様許へ行くな  
と云つたから、それで泣い  
たのだらう。」

「いゝえ。」と幽かな聲。

「何故偽を吐く。」

「……………」

「お前は十四にもなつてあ

て、それ位の事が解らない

のか？」

雛江さんはもう胸が一抔になつて、覺えずはら／＼と膝の上へ涙

を零しました。一體お父様はお酒を上ると平素の優しきにも似ず、

全然人違ひなさつたやうに嚴しくお成りになつて、理窟ばかり被仰





るのでございます。

「お父様、何卒お許し遊ばして……………」

と後は咽び入つて了りました。

「お客様に泣顔を見せるといふ事は失禮ぢやと思はんのか？」

「然う思ひます、次からは心得ますから、何卒此度ばかりはお許し

遊ばして……………」

途切れくりに切なさうに詫ひ入ります。

「切角斯うして大勢の客を招んで、家の者が泣いてゐたらお客は如

何心持がすると思ふ？」

「ハイ」

「幾ら女だつて直ぐ泣くなんて、お前も矢張りお母様に似たのぢや、

お前のお母様は何かといふとつまらん事にも泣きよるので、もうも

う弱つて了ふのぢや。」

「ハイ。」

「其處へ持つて来て、今日のやうな賑かな日にお母様があるいで好

いと思へば、代りにお前が泣く、お父様は實に不快で堪らん。」

「ハイ。」

「其様に泣きたければ是れから病院へ行つて、お母様と二人で泣

け！」

「もう決して泣きませんから、お父様今日の處は何卒お勘辨遊ばし

て下さいまし、願ひでございます。」

ヒタと疊の上にて手を突いて泣き入る。

此様子を聞いてゐた春やは堪らぬやうになりまして、後へ現はれ  
ました。



「何卒旦那様御勘辨遊ばして被下いますやうに願ひます、全く私がお付き申してゐながら行届きませんでございましたので、何とも申譯がございません。以後は精々注意致しますでございませう。」

と平蜘蛛のやうになつてお叩頭致しました。其處へバタ／＼と姉さん思ひの晋ちゃんが入つて来て、行成雛江さんの首に絡みついて、

「姉さん、早く寐ないの！」と叫く。

「こら、貴様も今朝泣いたらう！」

と一喝されて、彈ぢかれたやうに驚いて座る。

「僕泣かないよ、お父様！」

と鼻聲で、可愛い眼はまん丸くなつてお父様を見ました。

「偽吐けツ。」

「噤と睨まれて顛ひ上つた。」

「だつてねお父様、今日はお母様許へ行かなかつたんですもの……」

と甘へるやうに云ふ。

「貴様は幾歳だツ。」

晋ちゃんは一寸黙りました。平素は彼程に可愛がつて被下るのに、何故今夜は此様に怖いのだらう、と云つた風に不思議がつて。

「でもねお母様は僕等が毎日行かないと、病氣が早く癒らないと被仰つたの。」

「馬鹿、餘り毎日行くから癒らないのぢや。」

「眞實？」と疑ひ深い眸を凝らす。

「うむ。」

「偽だ、お父様は偽言ふんだ。」

と體を左右に揺振ります。



「何故親に向つて其様失敬な事を云ふか？」  
「御免なさい！」

ひよいと頭を下げたかと思ふと、序に素敏こくとんぼ返りをやり  
ました。

「何だ、其状態は……」とお父様は流石にお可笑くなつて噴き出し  
なさる。雛江さんも春やも不意を打たれて、お可笑いのを覚えてゐ  
ました。晋ちやんは遠慮なくお父様のお膝の上へ乗つて。

「其代りねお父様、明日は朝出かけに行くの、ねえ姉さん！ そし  
て歸りに又行くの、二度行けらあ嬉しいな、それで今日のと丁度入  
り合せだ旨い〜。」と手を叩いて喜ぶ。

「朝行つちや不可ん！」

雛江さんは疎と致しました。静と仰向いて見ましたら、それでも

最う笑ひ顔になつて、

「今夜お父様と寝ろ！」なんて夢中になつて晋ちやんを擲擲つて被  
居いましたから、ほつと安心して、

「お寝み遊ばせ。」

と逃げるやうにお叩頭して座を外して了ひました。下へ降りると  
後から晋ちやんが急いで駈けて來ました。

夜は十時を過ぎて、品川沖の波の音と、お庭の後を軋る汽車の音  
が、轟と響いてゐます。姉弟は枕を並べて柔かい寢床の中へ入りま  
した。

三

「莫迦に眠さうな顔してるぢやないか。」

「然うさ、俺ら昨夜位酷い目に遇つたことあない、何だ彼だつてお



前、もう十二時過ぎだつたらうな、寝たばかりなのにどんく叩きやがつてさ、起きて見りや馬鹿にしてるぢやないか、酔拂ひが電車に轢かれやがつたんだつさ、右の足がぶらくなんだよ、それから佐藤先生を起して一騒ぎ始まつてさ、やれくと思つて寝ると、此度あ徳丸様の看護婦が又起しに来て、奥様が急に熱が高くなつて大變だつてぢやないか、此奴あ打捨つておかれんと思つて飛び起さる、佐藤先生は又駈けつけるといふ騒ぎさ。」

「ほう、で、徳丸様の奥様は何うかなさつたのかね。」

「何ね、斯うなんだ、毎日彼あしてお出でになるお嬢様も坊ちやまも、昨日は又見えなかつたんさ、すると最う奥様が氣を揉みなすつて、嚙言に頻りと二人を呼びなさるんだ、イヤ何うも虫の音よりも細い哀れな聲だつたね、子供と云ふ者は彼様に可愛い者かと、俺つ

くく然う思つたね。」

東京病院の受附は机の上に雑巾がけをしながら此様お話をして居ります。何の室もまだ患者が寝んでゐて寂然と静かで、愛宕下しの朝風清く吹き入つて、眞白の服を着けた看護婦が麻裏草履の音輕う牛乳を運んで居ります。

「ふん、何うして又昨日はお出でにならなかつたんだね。」

「昨日はお前園遊會だつたぢやないか、何うも大した盛會だね、何しろ豪氣なもんさね。」

と一人は見て來たやうに申します。

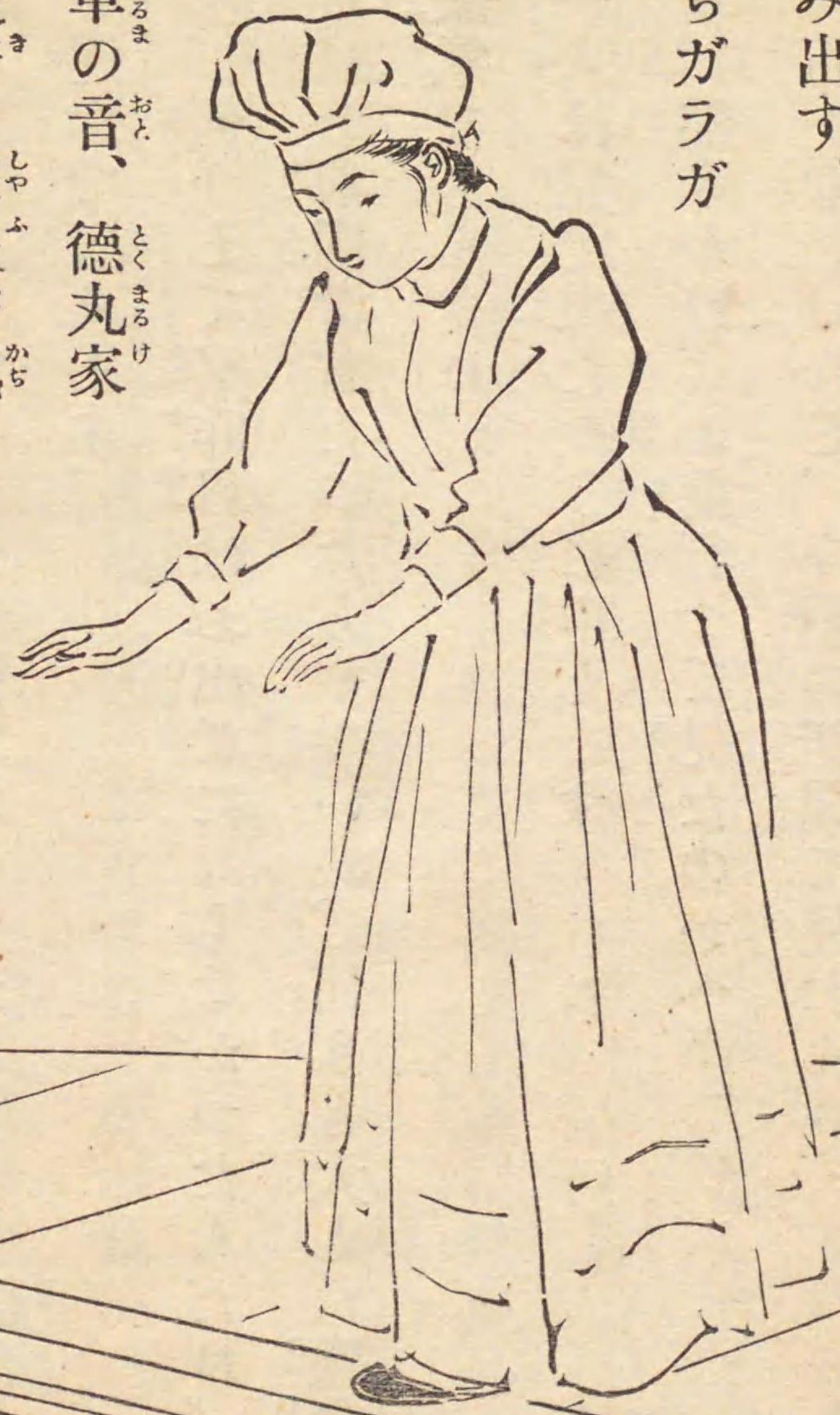
「ほう、然うかね、お前行つて見たのかへ？」

「何、行かないけれど、今朝の新聞で見たんさ。」

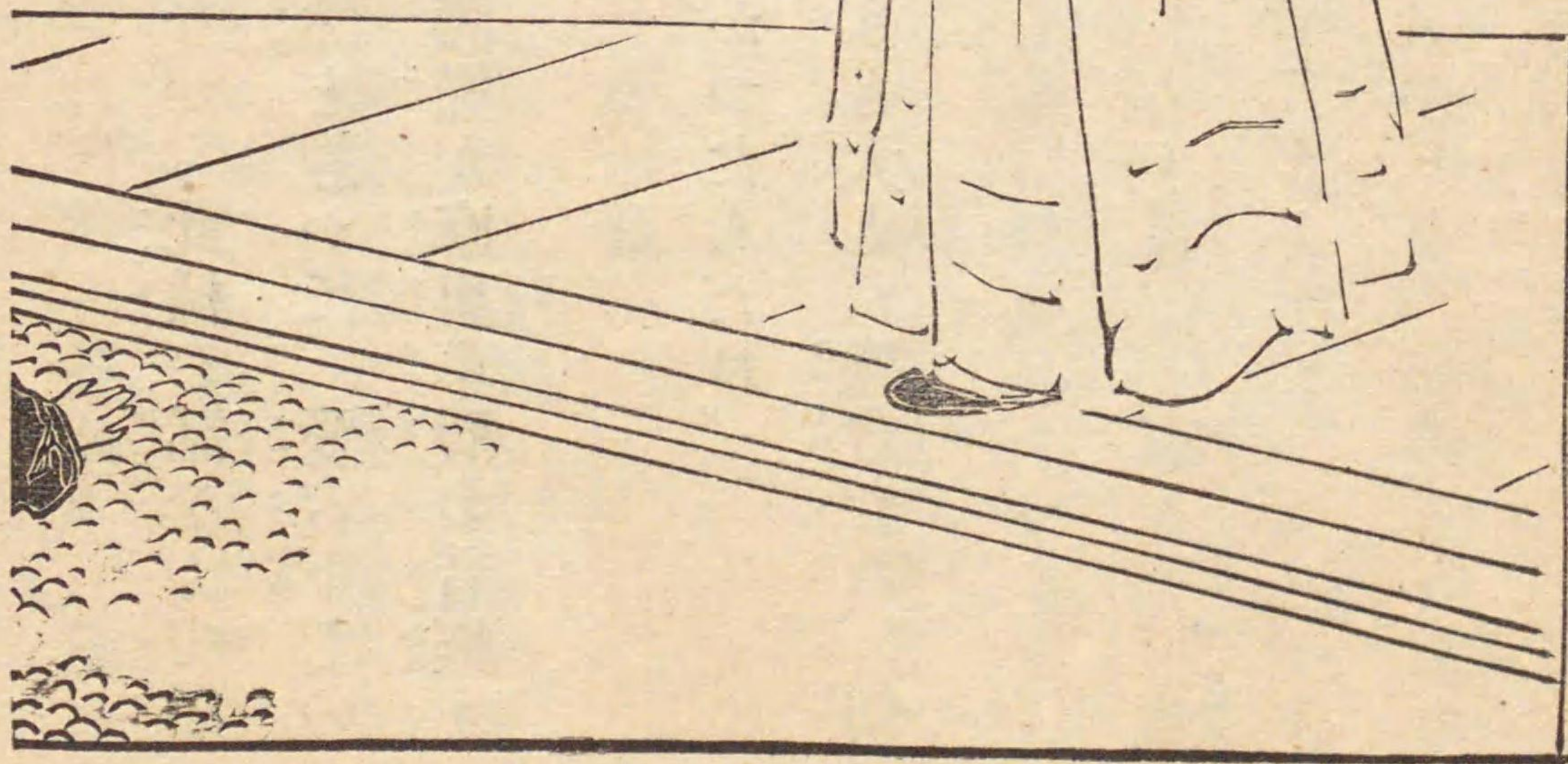
「何だ、利いた風なことを云ひやがつて……」



パンくくと帳面を拂て、スパく煙草を飲み出す。  
折からガラガ



ラと車の音、徳丸家の半被着た車夫が棍棒を下ろして幌を上げると、中からお下げに鶉色の大きなリボンを括付けて、紫の袴の裾から細い靴足長く見える雛江さ



んと、洋服の晋ちやんが下りました。  
「やあ、是れはお早うございます、奥様は昨日からお待兼ねて被居います。」  
一人の受附はそれと見ると駈けて出て、莞爾お世辞笑ひしながらお叩頭を致しました。

「お早う！」  
と優しく答へて二人は二階の段を上る。





お母様の室は芝公園を一目に見渡される極眺望の佳い處であります。然し立派な事を云へば無論御殿山のお邸宅の方がお立派でございます。けれどもお宅に被居ると何うしてもつひいろいろの事に氣をお使ひになりますから、それを脱れる爲めにお醫者様が入院を勧めたのでした。

扉を開けると看護婦は何處かへ出て其處に居ませんでした。お母様は美しい更紗縮緬のお蒲團を召して、高い寢臺の上にスヤ／＼と眠つて被居いました。一日見ぬ間に甚くお寢れ遊ばしたやうで、高いお鼻が際立つてつんとして見えました。

「お母様、お早うございます。」

「お母様、お早うございます。」

姉弟は傍へ寄つて、お土産に持つて來た昨日のお菓子をお枕元にお

いて、

「お母様、お土産を持つて參りました。お母様のお好きなウエハーね、召食れな。」

「オ、。」

と幽かに眼を開けて、お母様は眞白の細い手を出して二人の手を代り／＼に握りながら、

「能く此様に早く來て呉れましたね。」

嬉しさうに最う涙を浮べて被居います。

「昨日はね、お母様園遊會で忙しくつて到頭お見舞に上れませんでしたの、如何にかお待ちになつたでせう。」

「僕もね、行きたいと云つただけけれど、お父様は今日はお休みつて被仰つたの、僕園遊會なんか面白くなかつたよお母様！」



「ほ、ほ、ほ、然うかへ……」と徐ら起上つて、亂れた髪を搔き上げながら、

「お客様が澤山入らしつて賑かだつたでせう？」

「え、蓮子さんに千枝子さんに愛子さんにね、それから清岡様の叔母様に櫻井様の叔父様に、まだく澤山被入つてよ、そしてね蓮子さんの叔母様がお母様によろしく、お大切に遊ばせつて然う被仰つてよ。」

「それから、彼の立川様の叔父様も然う被仰つたので、僕お母様は最う直きお歸りになるつて然う云つたの。」

「昨日も矢張り夕方からお熱が出て？お母様！如何でしたの！」

「僕ね、昨夜お母様が急に悪くなつた夢見たの、驚りしちやつた。」

「あら、晋ちゃんも見たの、私もね、お母様が大變お熱が出てお苦

しみになつた夢見たのよ、まあ不思議なことね。」

と姉弟は顔を見合はせると、

「眞實に然うだつたんですよ、昨日はね、終日待つてゐても到頭來て呉れないのですもの、お母様は落膽して寝みましたの、そしたらね、夜中から熱が出て一時は大層苦しみましたよ。それでも今朝は最う全然下つて了つたから樂になりました。あ、二人の顔さへ見ればお母様は安心して快い心持になるのです、眞實に能く此様に早く來て呉れましたね。」

と沁々被仰る。二人はおろく聲になつて、

「私達も一日お母様に會はないで、如何に淋しかつたか知れないわ。」

「それでね、僕泣いたらお父様に叱られちやつたの。お父様はお酒を食つて昨夜お姉様を叱つたの、でも僕旨く胡麻化してやつた。」



「オホ、、、晋ちゃんは毎時でも元気が好くつて可いことね。で、雛江さんは何うして叱られたの？」

と優しい眼をお向けになりますと、

「私ね、お母様の許へ行かれないから、あの悲しくなつて一寸泣きましたの、それがお父様に見附かつて、お客様に泣顔をお見せ申して失禮だつて、大層お怒り遊ばして……私眞實に濟みませんわ、あのお母様此度お父様が被入つたら、能くお母様からお詫び被仰つて下さいませぬ。」

「其様な事なら何でもありませんよオホ、、、嬰兒だねえ、さあ二人共學校の時間が遅れると不可せんから、又明日来て頂戴ね、お母様はもうだんく、快い方でございますから、お父様に何卒御安心遊ばして被下まつて然う云つて頂戴よ。」

其處へ看護婦が入つて来て、

「あの御供の方が、遅くなりますから成るだけお早くと申します。」と腰を屈めました。

「では二人共能く氣をつけてね。」

「ハイ、それぢやお母様行つて参ります、御機嫌よく、お大切に遊ばせ。」

「お母様左様なら！」

二人は残り惜し氣に室を出ると、お母様は蹠跟しながら入口に立停つて、凝と可愛い後姿を見送つて被居いました。段を下りる時に二人は一寸振返つて見ますと、まだお母様が立つて被居るので、晋ちゃんはバタ／＼と駄け戻つて参りました。

「お母様、歸りに亦上ります！」



「いっえ、今日は是れで可いから明日ね、宜うござんすか。」  
 「うん、今日は二度行くつてお姉様とお約束したんですもの。」  
 「では早かつたらね。」

「ハイ、左様なら！」

と勢よく走つて行きます。

車夫の吉藏は金紋附の車に二人を乗せて、學習院へと急ぎました。  
 ……………

午後三時頃授業が終ると、晋ちゃんはお清書に「甲の上」とついたのを持って莞爾しながら、雛江さんの出て来るのを待つてをります。吉藏は先刻から參つてゐるので、二人は直ぐお迎への俥に乗りました。途中偶と道が違ふのに氣が注いた。

「吉藏、病院へ行くのよ。」

と雛江さんは車の上から聲をかける。

「イヤ、直ぐにお歸宅になるんでございます。」と切々と高輪の方へ走ります。

「不可ないよ吉藏、病院へ行くんだつてばさ、オイ、吉藏！ 直ぐお家へ歸るんぢやないよ。」

「晋ちゃんは怒つて蹴込をちたばたさせる。」

「あら、嫌な吉藏だわね、今朝から彼様に云つといたのに、お前聞えないのかへ？」

と雛江さんも大聲を出します。

「聞えてますがね、大旦那様が何でも急げと被仰つたのでさ。病院へお寄りにならないことになるよ、吉藏は眞實に助かりまつさ。此頃のやうに花でも咲いて些と陽氣になつて来りやまだ好いが、何うも



寒い時分毎日／＼歸りがけに愛宕下まで廻るな、眞實に可哀想でし  
たぜ。お嬢様も坊ちやまも餘り毎日行かう／＼と被仰るから、到頭  
此様目に遭ひなさるんだ。ね、些とあ吉藏の身にもなつて下さいだ、  
ホイ／＼、危ない！」  
落ちぬやうに用心して下さい、と云つた風に吉藏は此様ことを云  
ひながら走つてゐるけれども、車輪の音で二人には判然とは聞えま  
せん。  
「オイ、吉藏、承知しないぞ、何うして今日は其様ことをするんだ  
よ。失敬な奴め……」  
晋ちやんは危なく俥から落ちさうに藻掻きます。  
「まあ静かになさいな晋ちやん、何か理由があるのよ屹度、ねえ吉  
藏や、何うしたの、理由も云はないて酷いわね。」

俥はもう品川の電車通りへ出て、沖の方が遙に見えます。  
「吉藏つてば、オイ、吉藏！」  
「吉藏や。」  
「僕、飛び下りるから然う思へ。」  
「あつ、危ないよ晋ちやん、怪我すると大變だからさ。」  
「坊ちやま、温順しくして被居らないと落ちますよ。」  
吉藏は一寸俥の上を振返つて注意しながら、  
「ヘン、落ちられたら最後、此吉藏の首がぼんと一刎ねだ、ホイ、  
ホイ／＼。」と汗油を絞つて一生懸命に走る。俥は何時しか大きな御  
門を潜つて、兩側に櫻の花の匂ひこぼる、玄關までの長い砂利道を  
ガラ／＼と曳き入れられて、  
「お歸りい！」と威勢よく叫ぶ。



「御機嫌よう、お歸り遊ばせ。」

と春やは手を支えました。

俣から下りるや否や、晋ちゃんは行成吉藏に取組附いて、

失敬な奴めツ。」

と頭で吉藏の腹のあたりをうん／＼押して、

「さあ、何故病院へ連れて行かなかつたか、あやまれ、あやまれ！

オイ、吉藏、あやまらないか？」

オイ／＼泣聲を張上げて怒鳴りつけました。

「不可ません、晋ちゃん、まあ何うするの！」

雛江さんは止める。

「オヤ／＼何う遊ばしました、お坊ちやま、さあ此方へお出で遊ばせ。先刻から大旦那様がお待ちで被居います、さあお嬢様も直ぐに

お二階へお出で遊ばして……………」

と春やは晋ちゃんを抱き寄せようとする。吉藏は汗を拭きながら

ニタ／＼笑つて、

「坊ちやまは甚い力持にお成りなさいましたね、や、どつこい／＼、イヤ、どつこいしよ。」と一攫みに引抱えて玄關へ入れる。春やは手

早く靴を脱がせて、

「吉藏が悪いんぢやございませんの。お坊ちやまのお父様が直ぐにお歸りになるやうに被仰つたのでございますよ、ホ、ホ、ホ、まあ大層な勢で被居いましたこと。」と笑ふと、

「だつて僕、僕此の清書をお母様にお目に懸ける筈だつたのに、吉藏が……………吉藏が連れて行つて呉れないんだもの……………」

例のお清書を片手に差上げたまゝ、わあつと泣き出してしまし



た。

聴てやう／＼賺してお父様のお部屋へ連れて行きました。

四

何事か起つたかと、雛江さんは袴の儘ちやんとお父様に向ひ合つて座つて居ります。其隣りに晋ちやんは泣鳴咽りしながら窮窟さうにまぢ／＼お父様を見上げては、お膝の上に両手をおいてゐる。

お父様のお話はざつと斯うでした。

今日お父様が病院へ入らした處が、お醫者様のお話では、何分お母様のお體は大分衰弱して被居るから、今の處安靜といふことが一番必要である。だから成るだけお家のお方がお越しにならぬ方が可い。殊に毎日／＼お嬢様と坊ちやんがお見舞に入らして、偶として昨日のやうに御都合の悪い時があると、酷く氣をお揉みになつ

て、大層體の爲めに悪いから、何卒當分二人のお出でを見合はせて頂きたい、それに此頃肺炎の疑ひがあるのだから、尙更遠避けて貰はねばならぬ。

「といふ話であつたから、お前達は明日から行く事ならん、お母様の病氣を早く癒したければ行つちや不可ないのだ、宜しいか、解つたか。」

と云はれて、雛江さんは悲し氣な聲を出しました。

「ではお父様、お母様は肺病にお成りなつたのでございますか。」

「まだ肺病と云ふ程でもないが、肺に熱を持つてるのだから、まあ然う云つても可いやうな譯ぢや、だからお前達は當分決して行くことならんぞ。」



雛江さんは黙つて俯向きしました。晋ちゃんはお父様とお姉様を代りくくに見較べながら、

「ぢや、明日から病院へ行つては不可ないの、お父様！」

「うむ、然うぢや、行くとお母様の病氣も癒らないし、又お前達も病氣になつて了ふのぢや。」

「でも、今朝もお母様は僕等の顔を見ると安心すると被仰つたんだもの、ねえお姉様！」

雛江さんは俯向いた儘、黙つて頷いてゐます。

「お母様が然う思つても、醫者の云ふ通りにしないと不可ないのぢや。」

雛江さんはしくく泣き出して了ひました。晋ちゃんもぼろく涙を溢して、

「ではねお父様、明日もう一度遣つて頂戴、そしたら當分行かないから。」

「お父様何卒もう一度だけ許して下さいまし。」

「然うはならん、お父様は今日丁とお母様と相談して來たのぢやから、お母様も其心算で待つちやゐない。そんな大きな形してゐて何故然う聞分けがないか。」

と叱られて、

「いやだく、僕いやだ、僕もう一度お母様許へ行くんだ、お父様は直き彼様事を被仰るんだもの、お母様の處へ行きたい、お母様の處へ行きたい！」

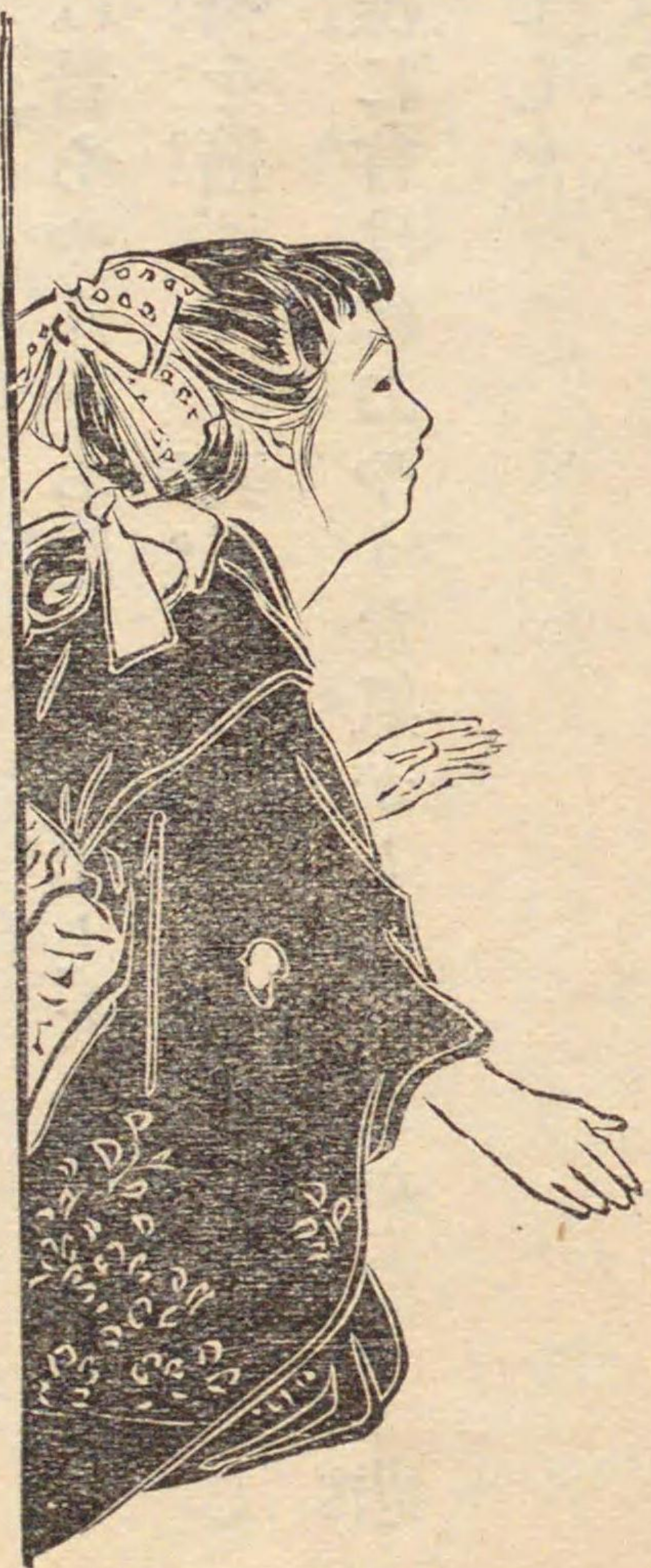
「到頭暴れ出して、足をばつたんく仰向けになつて了ひました。」  
「馬鹿ッ。」



お父様は睨みつけなさる。  
 「晋ちゃんは大人だわね、そんな解らないことを云ふもんじゃないのよ。さ、お姉様と下へ行きませう」  
 !  
 心の中の苦しさを味えて弟を宥めるのは如何に辛いでせう。此騒ぎに飛んで来たのは春や、



「まあ、坊ちやま何うなさいました、さあ此方へ入被いまし、春やが好いものをお目に懸けませう。」  
 と辛との事で背負つて下へ行きました。



「何うも手に負へぬ兒だな。」  
 お父様は歎息をなすつて、  
 「母親が餘り我儘に育てるから彼様になつて了ふのぢや。お前なぞも能く心得るが可い。」  
 「ハイ。」



「それで解つたら最う可い。晋が幾ら行きたがつても其處はお前が姉の役目ぢや、旨く賺しておかなきゃ不可んぞ。」

「ハイ。」

雛江さんはお母様の事を悪く云はれるのが何より辛いのでした。

お父様は近頃何かお母様に對して冷たいやうに思はれるので、少女心にも女の身は悲しいと思ひました。で、悄悄お部屋を退つて下へ降りて見ると、春やは晋ちゃんをお庭へ連れ出したやうでした。袴を脱つて學校のお荷物を擴げて、其日のお復習を初めようと致しました。が、是限りお母様に會はれぬやうな氣がして、後から悲しさが染々込み上るのでした。

此日のお夕飯は二人共美味くありませんでした。

夜になつてはぼか〜と生温かい春風の吹き入る縁の障子を明け

て、机に向ひながら、朧にかすむ月影に灰白う見える庭の櫻を茫然眺めて、深く物思ひに沈んでをりました。晋ちゃんは泣き腫らした眼をばちばちさせて机に凭れ掛つて居ります。

「晋ちゃん、勉強しないと不可ませんよ。」

「だつてお父様が彼様事云ふんだもの……」

と最うペソを搔き出します。

「ぢや、あの何、晋ちゃんはお母様の病氣が早く癒らないでも可いの？」

「うゝん。」と頭を振る。

「それなら丁と温順しくお父様の被仰ることを訊かなきゃ不可ませんよ。」

「だつて……」とさも弱つたやうな顔して、



「ぢや、お姉様はお母様のお顔を見たくないの？」と云ふ。  
 「そりや見たいわ、だけれど爲方がないから我慢してるのよ。ね、  
 晋ちゃんも我慢して被居い、其代り後日お全快になつたら第一番に  
 連れて行つて上げるわ。」

「屹度！」

「え、屹度よ。」

「何時頃？」

「さあ……直きだわ。」

「お花が散つて了つた時分？」

「そりや然うかも知れないわ。」

「ぢやつまらないや、お母様は早くお家へ歸つてお庭の御殿櫻が見  
 たいと云つて、楽しみにして被居つたんだもの！」

「だけれど急いでお歸りになると、後で又悪くなつちや不可ないわ、  
 御殿櫻は來年亦咲くんだから、然うねお母様がお歸りになるのは、  
 全然葉櫻になつて斯うソヨクした風の吹く頃でせうね。」

此様お話をしながら其夜は淋しく寝んで了ひました。

翌くる日は學校から歸つても何やら物足らないやうな氣がして、  
 姉弟とも些とも氣が落着きませんでした。例の勉強室へ入ると直ぐ  
 お母様の話を始めます。雛江さんは片時放れず心に思つてはゐます  
 が、慎ましく黙つてをりますけれども、晋ちゃんはまだ頑是ないも  
 のですから直き云ひ出します。

「今日はお母様は待つて被居たらうね、お姉様！」

「でも、お母様も屹度諦めて被居るわ。」

「然うかしら、僕淋しくなつちやつた。」



「眞實に淋しいわね。」  
 「明日お父様に内緒で一度行かうよ。」  
 「其様こと出来ないわ、お父様に内緒なんて、そんな親不孝なことが何うして出来るもんですか、晋ちゃんは其様心を起しちや不可ないことよ。」

と戒めましたが、其實雛江さんも然ういふ心が偶と起つたのでした。然しそれは車夫の吉藏に堅く吩咐けてあるとですから到底出来ないと考へて、聽て一策を思ひ浮べました。で、夜晋ちゃんが寢床へ入ると、雛江さんはお母様へ上げる長い手紙を書きました。當分お見舞に上れないで淋しいと、お母様も嘸つまらないでせうといふと、私達は一日でもお母様のお顔を見ないでゐるのが嫌ですけれど、餘り毎日伺ふと御病氣に障るといふとですから辛抱してゐ

ます。お母様は一日もお早くお全快になつてお歸り下さいまし、私等二人はそれを楽しみに一生懸命勉強致して居ります。今夜の月は何だかぼんやりしてゐますね、花曇りといふのでせうか、今年の今頃、丁度此様晩にお母様と二人でお琴を弾いてゐましたね、それなのに今年には彼様淋しい病院に被居るんですもの、私眞實に悲しくなつて了ふわ、お母様も屹度それを思ひ出して泣いて被居るんぢやないかと思つて、雲に掩はれた月影を眺めながら泣いてゐますの、だけれども彼雲は今直き去つて明るい世界になりますわね、お母様の御病氣だつてその通りですから、最う直きお歸りになると思つて居りますの………

といふやうなを假名澤山に美しく書き列ねました。幾度も讀んで見て封筒に納めてから、さて是れを何うしてお渡し爲ようかと考



へましたが、郵便で出さうにも切手はなし、無論お錢なぞ手に持つたともありません、で、止むを得ず春やに頼みました。

「お前、後生だから明日私等が學校へ行つてゐる間に病院へ行つてお母様にお渡ししてお呉れな、そして屹度御返事頂いて来て頂戴よ。」

と云はれて春やは大層心配致しました。明日病院へ參る用事があれば可いけれど、若しなかつたら外へ出るに困ると思つたからです。けれども雛江さんのお心の中をお察しすると誠にお氣の毒に堪へませんから、兎も角も承諾致しておきました。

五

扱翌日は學校から歸ると、お母様から如何御返事が來てゐるか、行成春やの顔を見ますと、

「まあお嬢様お悦び遊ばせ、今日は可い鹽梅に病院の近所まで參る

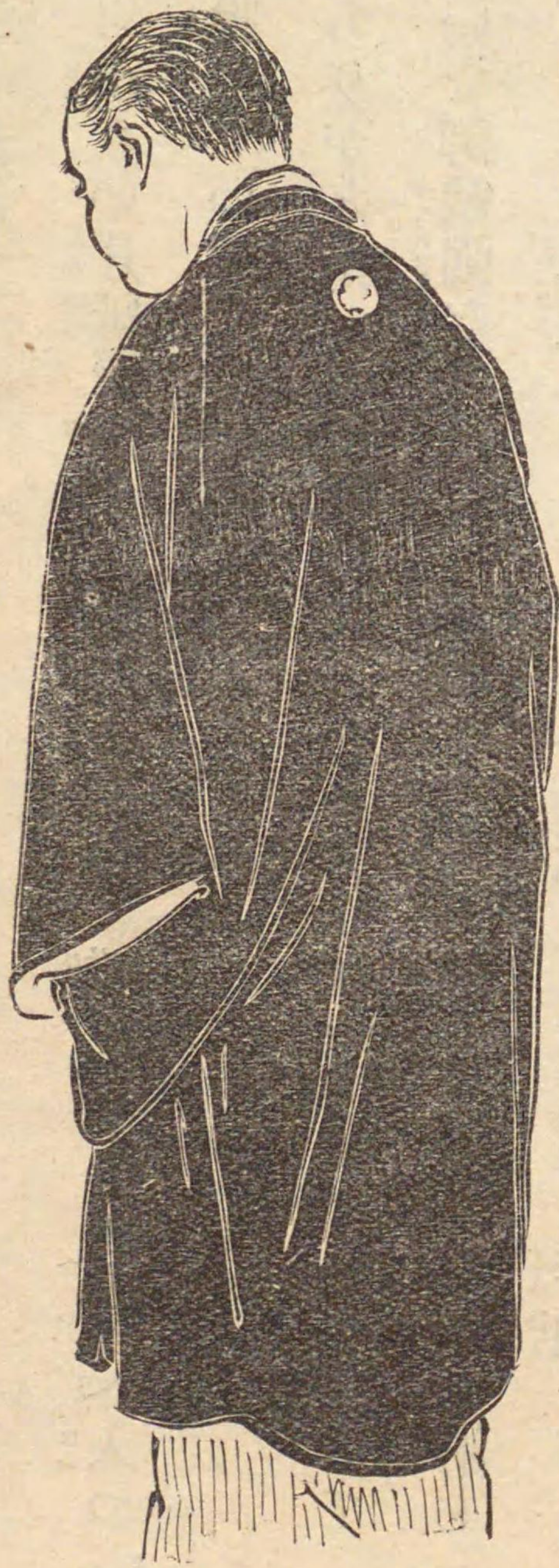
用事が出來ましたから、一寸お寄りして參りました。さ、是れが御返事でございます。」

と懷から小さい片紙を出して呉れました。雛江さんは部屋へ入つて、袴も脱らないで直ぐ讀んで見ると、

お手紙ありがとうございます、お母様はね、だんく、快い方ですから決して心配しないで御勉強なさいよ。此頃は二人の顔を見られないで淋しいけれど、それを我慢してゐないと早く癒りませんから辛抱してゐます。貴女達も風など引かぬやうに用心して被居いよ。お母様は可愛い二人に離れて獨り病院の冷たい寢臺の上に仰向けになつて、昨夜も凝と耳を澄ましてゐますと、雛江さんがお母様の好きな「住吉」を弾いて被居るのが幽かに聞ゆるやうでした。で、偶と起きて窓のカーテンを引いて外を眺めますと、折から淡い春の月が公園の樹木



の間から朧氣に見えて、櫻の花がちらく散つて居りました。お庭の櫻も如何にか美事だらうと思つて居ります。花の時代は短かいからお母様は今年は到頭見ずに仕舞ひます。其代り來年は面白いお花見を致しませうね。なほ呉れくも云うておきますが、お母様の不在の間は殊にお父様の被仰ることを温順しく訊かなきゃ不可ません



よ。  
と淡墨で書き流してありました。雛江さんは先づ涙さし含まれて頻りと鼻を吸つてゐると、何時の間にかお父様が後に立つて被居つて、

「雛江、何故泣いてゐる？」と訊ねられました。

「ハイ、いゝえ」

「慌てゝ例の手紙を懐へ捻ぢ込んで、袴を脱ぎに掛ると、」





「今、何を讀んでゐたか、お見せ?」

「……………」

後向きになつて袴を脱つて、帯を締め直し掛ると、お父様は傍へ寄つて、

「親に物を秘すか!」凜とお聲が響く。

「いゝえ。」雛江さんは顫へてゐます。

「見せないか?」

「ハイ。」

「どれ!」

手をお出しになる。

「あのお父様これはあの何でもございませんの……………」

「お見せと云つたら見せるが可い。」

「……………」

「どれ!」

「お父様はつかくと雛江さんの體に手をかけて、懐からお母様の手紙を攫んで被居いました。一寸讀んで見て、

「うむ」こりやお母様から來たのぢやな。

「ハイ。」

「どうして此様ものを手に入れたか?」

「あの……………」

「正直にお云ひ!」

「ハイ。」俯向いて忸怩してゐると、其處へ春やが入つて來て驚り仰天する。飛んだ事になつたと思ひながら、黙つて雛江さんのお袴を疊んでをりますと、



「春、貴様が此使をしたのだらう。」

「ハイ、どうも恐入りますでございます。」

向き直つて御叩頭しました。

「春、貴様は怪しからん女ぢやな。」

「恐入ります、つひお嬢様をお可哀想だと存じまして……………」

「お父様、春が悪いのではございませぬ、あの私が無理に頼みましたものですから、それで春は參つて呉れましたのです。お父様に伺はないで此様を致しまして申譯ございませぬ、どうぞお許し遊ばして……………」

今更にお父様に秘密の事をした我過失を深く悔いて、雛江さんはほろりと涙を零して疊に両手をつきました。

「そんな事をして病人に氣を揉ませれば、毎日行くよりも毒ぢや、

雛江、お母様を少時別荘の方へやるから然う思へ！」

權もほろゝに斯う云ひ渡して、すうつと室をお出になりました。

跡に雛江さんは岸彼と身を伏して泣き沈みました。

二三日過ぎて學習院から歸ると、お母様は鎌倉の別荘へ引移りになつた事を春やから訊きました。雛江さんは餘りの悲しさに夜毎夜毎お琴を出してお母様の好きな「住吉」を復習しました。

「逢うて別れて其後は、またの花見を楽しみに、日數かぞへて思ひ出す……………」

といふ一節になると、最う涙に咽んで思はずお琴の上へ突伏して了ふのでした。

月日は容赦なく流れて一月計り経ちました。お母様からは病氣も全快したから是非歸京したいと云ふお報知がありました。雛江さん



は飛び立つ許りに悦んで今日か明日かと待つて居りましたが、お父様の方にいろ／＼都合もあるし、又、肺を患らつたのであるから危険である被仰つて、直ぐに執事の山木といふお爺さんをお使に遣はされました。すると其儘になつて了つたのでした。雛江さんはお父様のお仕打が酷いと思ひました。殊にお母様のを云ふと、何だか嫌なお顔をなさいますので、心の中に沁々情なく思ふのでした。のみならず此頃一つ嫌なとは、園遊會があつて間もなく雛江さんのお邸宅へ何處からか一人の叔母様が参つたのです。年はお母様より遙と若くつて中々美麗であります、何處か下品な人でした。其叔母様が色々とお父様のお手廻りの用など致して、雛江さん達にも世話を焼いて呉れます。

「變な叔母さんだこと。」と心の中に思ひましたが、時々女中共が集

つては能く叔母様の悪口などを申して居りますので、卑しい身分だといふとが解りました。

或日丁度日曜のと、雛江さんは晋ちやんと二人お庭へ出て遊んで居りますと、叔母様はお父様と二人ぶら／＼散歩に出てゐて、此様お話をしてゐるのが耳に入りました。

「肺病といふ病は到底治りませんのですか。」

「イヤ、全然治らないといふ事はあるまいが、まあ長いだらう。」

「大抵何時頃お歸りになる御都合でございますか？」

「まだ解らない、だん／＼暑さに向ふしするからね。迎も急に歸す譯に行かん。」

「さう。」と叔母様は少時考へて、「あの私をも夏になつたら鎌倉へお伴れなすつて下さいな。」



「うむ」と答へて、ひよつと此方をお向きになると、葉櫻の蔭に立つてゐた雛江さんとぼつたり眼が合ひました。

「オ、雛江、其處にゐたのか。」

と少し慌て、被居る。

「ハイ、今参りましたの。晋ちゃんお池の方へ行きますせう！」

と手を携いて彼方へ行きかけると、

「まあ、雛江さん此方へ被入いな、叔母様と御一緒に遊びませう。」

と申します。

「有難う！」と莞爾笑ふと、

「雛江、もうお母様の許へは行きたくないだらう！」と擲掄ひなさる。

「……………」

「雛江さんは勝氣ですから悔しいと思ひました。」

「僕行きたいよ、お父様。」

大島絢の筒袖がひよいと頭を擡げました。

「貴様は嬰兒だから爲方がない。雛江、叔母様と遊ぶが可い！」

「ハイ。嫌さうに忸怩して居ります。」

「雛江さんは何故私をお嫌ひなさるの、叔母様は雛江さんを大好きよ、さあ御一緒に遊びませう。」

傍へ寄つて来て二人の手を取らうと致します。

「有難う、又後で、ね晋ちゃん然うでせう。」

「うむ。」と頷く。

「オヤ、すつかり嫌はれて了ひましたよ、それぢや御自由になさいまし。」

叔母様は怒つてお父様の傍へ駈けて行きました。派手なお召に博



多の帯をきゆつとめて、髪なんか似合ひもせぬ庇にして、嫌味ツ  
たらしいたらありません。

二人はお池の傍へ来て杜若の咲いてる處に蹲踞んで見てゐますと  
お父様と叔母様はずつと汽車道の方へ歩いて被居います。

「嫌な叔母さんだわ。」

「あの叔母さん、能く僕にお菓子呉れてよ。」

「然う何時頂いて？」

「ほら、昨夜もお姉様に上げたでせう、それから一昨日もね、毎日

呉れるよ、好い子だつて……。」

「然う、彼叔母さんに頂いたの！」

と嫌な眼をすると、

「頂いちゃ不可ないの？」

「然うぢやないけれど……晋ちゃんも彼叔母さん好き。」

「好きでもないや。」と無邪氣に答へます。

「それぢや嫌ひ？」

「嫌ひでもないけれど……。」

「お母様と何方が好いの？」

「そりやお母様が好いことは定まつてるさ。」

雛江さんは伏目になつて池の中を無意識に眺めながら、今聞いた

お話を思ひ出しました。肺病！ 鎌倉！ 何うしてもお母様のこと

に違ひない、彼叔母様は眞實に不可ない方よ、若しかお母様の代り

にでもならうといふやうな恐ろしい考へを持つてる人ではあるまい

か、私は其様ことがあらうとは思はないけれど、此間女中部屋で秋

やが其様話をしてゐて、然うなるとお可愛想なのはお嬢様と坊ぢや



「まだ。」と云つたつけ、と思ふとぶるく打顛ふのでした。是れは何でもお母様に早くお知らせして上げねばならぬ、あゝお母様がお聞きになつたら如何にかお驚き遊ばすだらう、それにしても其後お母様は如何御容態で被居るだらう？知りたいわ、あゝ逢ひたい、お母様に逢ひたい……と懐しの念に駈られて、潜然と泣き入るのでした。

「お姉様、二人で鎌倉へ行かうよ！」と時々晋ちやんが寢床へ入ると、思ひ出したやうに申します。

「でもお父様に叱られるもの！」

「可いぢやないか、後で謝罪るさ、お姉様は瀛車に乗ると知つてるの？」

「知らないけれど、停車場へ行つたら解るわ。」

「ぢや行かうよ、ね、僕早くに母様のお顔が見たいんだもの。」

「私もよ、お母様は何故早く歸つて下さるのでせうね。」

「僕淋しいや！」

友禪の蒲團を涙で濡らして、二人は何時しかスヤ／＼と眠つて了ひました。

六

御殿山の櫻はもう青葉の茂みに變つて、霧島躑躅の白、赤、など美しく庭の面を彩りました。初夏の日光は漸く強い光りを投げて、新緑の葉風涼しく見るもの皆活々として、見渡す野邊は麥の穂先の青々と、海の色、水の面など何となく夏めいて、ぼか／＼と吹く風にも生温い氣倦いやうな重味があつて、うつらくと眠氣催す或日、徳丸邸の裏門を抜けて二人の兄弟は新橋の停車場へ駈けつけまし



た。いよく鎌倉行の決心をしたのでございます。品川の停車場から直ぐ眼の下ですが、彼驛では役員共が皆知つて居りますから、態遠い新橋まで参つたのでした。太い黄八丈の袴に白襟品よく、純子の帯を立矢の字にめた雛江さんと、洋服の晋ちゃんは、慣れぬ歩行の疲れに困憊して、兎も角待合室へ入りました。

「此様に汗が出てよ。」

と絹の半巾で額を拭きながら一寸足を見ると、空気草履から白い足袋が埃で茶色になつてゐます。

「お姉様、瀛車は何時出るの？」

「見て來ませう、被居い！」

ドヤ／＼と込み合ふ中を迷々して時間表など仰向いて見ましたが、何が何だか薩張り解りません。

「何うして乗るんでせうね。」心細い聲を出します。

「お姉様知らないの！」

「え、。」

其中十一時十五分前になると、神戸行列車が出るので、蹴立たましく一頻り鈴を鳴らしました。すると大勢の客はぞろ／＼動き初めて、ブラットホームへ流れ出ます。其雑踏の中に二人は泣顔になつて、唯無暗と狼狽て居りますと、其舉動を不審に思つたか、役員の一人が出て来て、

「貴女方は何方へかお出でになるんですか？」

と訊きました。

「ハイ、あの鎌倉へ行きます。」

「お二人きりですか。」



「ハイ。」  
 「外にお連は  
 ないんです  
 か？」  
 と念を押さ  
 れて氣味悪く  
 思ひました。  
 「ハイ、今日  
 は二人きりで  
 すの、あの鎌  
 倉までやつて下さいな。」  
 「鎌倉に御存じの家でもあ



「ハイ。」  
 「は、あ。」領いて又一人の  
 役員を呼ぶ。  
 「何うしたんだ？」と駈け  
 て来る。  
 「二人ぎりだと云ふんだが  
 何うしたんだらう。」  
 「名前を訊いたかへ？」  
 「イヤまだ、貴女お名前は何と云ひますか？」  
 「……………」  
 「坊ちゃん、お家の名前は何と云ひますか？」





晋ちゃんはお姉様の顔を見上げて、云つても可いの？と眼で訊いてをります。

「名前を訊かないで乗せて下さいな。」

役員はつく／＼見入つて、

「では切符買ひましたか、鎌倉行の。」

「いゝえ、あらお錢が入るのね。」

「はゝゝゝ、然うですとも、お錢がなきや瀛車に乗れないのです。」

「役員達は顔見合はせて何か小聲で相談して居りました。何時の間にか人が山に集つて回邊を圍つてゐます。」

「兎に角今日はお歸りになつた方が宜いでせう！」と一人が申しま

す。  
「然う集つちや不可ん。」

不意に大聲で怒鳴つてサーベルの音カチ／＼とお巡査さんがやつて來ました、始終を訊いて例の手帳をポケットから出します。

「お名前は何と云ひますか？」

「お幾歳ですか？」

「坊ちゃんは何？」

「黙つてゐちや解らないから早く被仰い！」

「お巡査さんは持て餘してゐますと、

「やあ、徳丸様のお嬢様何うなさいました。オ、坊ちゃん何うした



「んです？」

洋服の立派な紳士が人込の中からひよつくら飛び出しました。

「あら、立川様の叔父様！」

と二人は行成取組る。

「オ、先達は園遊會で難有う、で、今日は何うなさいました？お母様は其後如何です。」

「ハイ、あの最う全然お恢復になつて鎌倉に被居いますの、今日は二人で参らうと思ひまして……………」

「そりや結構ですな、然しお供は？」と二人を両手に携いて、一同に向ひ、「やあ皆様お苦勞様、私が引請けますから。」

と群集を放れて、

「貴女、お父様に無斷つて來ましたね。」

「……………」

「お歸りにならないと御心配になりますから、今日はお止めなさいまし。」

「叔父様、是非お伴れ遊ばして頂戴な。」

「よう叔父様、伴れて被行つて頂戴。」

と兩脇から強請みます。

「や、此奴あ困つた役廻りになつたな、何うせ私は大阪迄行くのですからお伴れするのは可いけれど、何しろ困つたな。」

と頻りと頭へ手をお上げになる。時間はいよく切迫て参ります。

叔父様は兎もあれ二人の白切符を買つて來て、

「さあ被居い！」と被仰る。二人は俄に嬉然して後に尾きました。

一等室は三人限りで誰もゐませんでした。



「叔父様どうも難有う！」  
「叔父様どうも有難う！」

七

立川様の叔父様はお母様の御縁家にあたる方で、大層子供好きです。すから、子供の云ふことなら何でも嫌とは被仰らないのでした。で、今日は大阪迄急用があつて被居る際此様事になつて、氣は急ぐし能く事情を訊く間もなく瀛車に乗り込んで了つたのです。

瀛車が品川の邸宅の裏を通つた時は、二人共體が小さくなりました。心配して迂路くしてゐる春やの顔だの、お怒り遊ばしたお父様の怖いお眼など、目前に見えるやうでした。鶴見神奈川と何時しか過ぎて、空快く晴れた田の面の景色は美しく日の光りを浴びてゐます。叔父様は悠々と葉巻を燻かしながら、

「然し斯うしてお連れ申しましたが、お家では嘸御心配になつて居りますから鎌倉へ着いたら着く私から電報を打つておきませう、それにしても叔父様は後でお父様から叱られなきやならん、弱つたな」と被仰います。

「叔父様、どうも濟みません。」

「何故、黙つて出て來たのです。」

「……………」

「そしてお母様がお全快になつたら何故早くお歸りにならないのですか。」

「あの、お父様の御都合があると被仰つて……………それに病後だから別荘の方が静かで可いつて……………」

「は、あ。」と額を擧めて被居います。雛江さんは偶とお父様は自分



達を成可くお母様に近附けないやうにして被居るんぢやないか、と  
悲しく思ひました。

「叔父様は是非明日の朝大阪へ着かなきやならん用があるので、困  
つたな、別荘へお寄りしてゐると一瀛車後れるし……と云つて二  
人を停車場で放すのは心配だし……」

「叔父様、二人で大丈夫ですわ道を知つてをりますから。」

「去年の夏行つたから僕も覚えてゐるの、」

「イヤ、宜いです、お供しませう、久振りでお母様にもお目に懸り  
ますから、丁度幸でした。」

「どうも濟みません。」

「然し、次からは決して此様となすつちや不可ませんよ。お父様や  
お母様の體面にも關りますから。」

「ハイ。」雛江さんは重ねの我罪に責められて、悄然と頭を垂れ  
ました。平沼で叔父様からお辨當を戴いて大船へ來ると、横須賀線  
に乗り代へました。間もなく、

「鎌倉！ 鎌倉！ と呼びます。三人は下車して俵を備ひ、二人は  
合乗で先に立ちました。」

別荘は大塔宮へ行く道、丁度文覺上人の屋敷跡と向ひ合つた閑靜  
な處に建つて居ります。前は昔頼朝公が雪景を作つて酒宴を開かれ  
たと云ふ衣張山と相對して、山の後に青砥藤綱がお錢を落して、明  
松を買つて拾つたといふ有名な滑川がちよろくと流れて居ります。  
二輛の俵がガラくと街へ入ると、其日も日曜でしたが小學生徒の  
遠足でもあるのか、女生徒が澤山二列になつて向ふから來るのに出  
遇ひました。雛江さんは何となく懐しく思はれて、幾度も俵の上か



ら振返つて見るのでした。誰の顔を見ても楽しさうに莞爾してゐるのに、立派な家に生れながら何故私等は此様に切ない思ひをするのだらうかと染々考へました。聽て俵は別荘の前へ來て梶棒を下ろされる。此邊は家もまばらでお隣りと云つても遠いのですから、晝ながら唯寂としてをります。また新しい御門の中には青々とした小松が澤山植え込んであつて見るから涼しさう、平家造りの長い椽側に心持よく日が當つて、硝子隙子にきら／＼反射してゐました。三人は俵から下りて眞白の小石を敷き詰めた道をうねつて、そろ／＼玄關まで歩いて行くと、留守番の爺やが裏庭からひよいと顔を出して、

「やあ、これは。」と頓狂な聲を出す。

「能くお越しなさりました、さあ／＼。」と奥へ駈け込むと、直ぐ婆

やが出て來まして、

「オヤ／＼、これは／＼。」と不意の訪づれを訝かしげに打守つて、何か迷々して居ります。雛江さんは早速、

「婆や、あのお母様は？」

「奥様でござりますか？」

「あゝ。」

「奥様は……………ハイ。」

「もう全然およろしいつてね。」

「ハイ、もう全然お全快遊ばしまして誠に目出たうござります。」とお叩頭します。

「あの、今居らして？」と家の中を見廻しますと、

「あの奥様でござりますか、奥様は……………」



と不思議さうに三人を見上げ見下して、  
 「奥様は先達房州へお越しなさいましたが、ハイ、あの山木様がお  
 越しなさりまして早速お出で遊ばすやうにと旦那様からの仰せでこ  
 ざりまして、オヤ、お嬢様は御存じて被居いませぬのでござります  
 か、ほう……」

と驚り致して居ります。

「あら、房州のお祖母様の許へ被行つたの、まあ知らなかつたわね！」  
 餘りの意外に呆れ果て、三人は顔見合はせたまゝ、立慄みました。

八

立川様の叔父様は兎も角お急ぎの體ですから、此儘東京へ二人を  
 伴れて歸る譯にも行きませぬし、爲方がないから、何れ二三日中に  
 歸ります、それまで婆やさん何分二人を頼むと云つて、

「それぢや叔父様は行つて参りますよ、それ迄にお迎へが來たら温  
 順しく歸るんですよ、可いですか。」と二人に云ひ残してお出發にな  
 りました。取り残された二人は相抱いて泣くより外に道はありません  
 でした。

「あゝ悪いことをした、お母様に逢ひたい計りに邸宅を逃げ出した  
 りなんかして、お父様に濟まない。」と悔悟の涙は止め度もなく溢れ  
 出ます。それにしても何故お父様は私達に秘して被居るのだらう、  
 御病氣がお全快になつても、唯お父様の御都合くと被仰つてお歸  
 りをお延ばしなさるのだもの、餘りなお父様よ、と胸を搔き撈られ  
 るやうな苦思がするのでした。

廣い別荘には婆や夫婦が居るばかり、つひ先頃迄はお母様が此處  
 に居らしたのだと思ふと、八疊の床に活けられた白百合の、主な



きを啣つが如く詫しさうに頭垂るを見るにつけ、お母様のお手すさ  
みかと懐しく涙ぐまれて、

「婆や、お母様は如何鹽梅で被行つて？」  
と又しても訊きます。

もう大層お健康にお成り遊ばして、お單獨でずん／＼御散歩遊ば  
したり、時々お冬さん（女中）を連れて海岸へお出掛けになつたり致  
しました。そして始終お嬢様やお坊ちゃんのことばつかり被仰つて、  
早く歸つてお顔が見たい／＼と寢言のやうに申されました……  
と染々云つて呉れますので、唯もう涙に咽ふ計りでした。

「お母様は今頃房州のお祖母様と如何お話をして被居るだらうね、  
晋ちやん、此様ことなら眞實に來なきや好かつたわ。」  
「うむ、僕歸りたくなつちまつた。」と是も泣顔をして居ります。

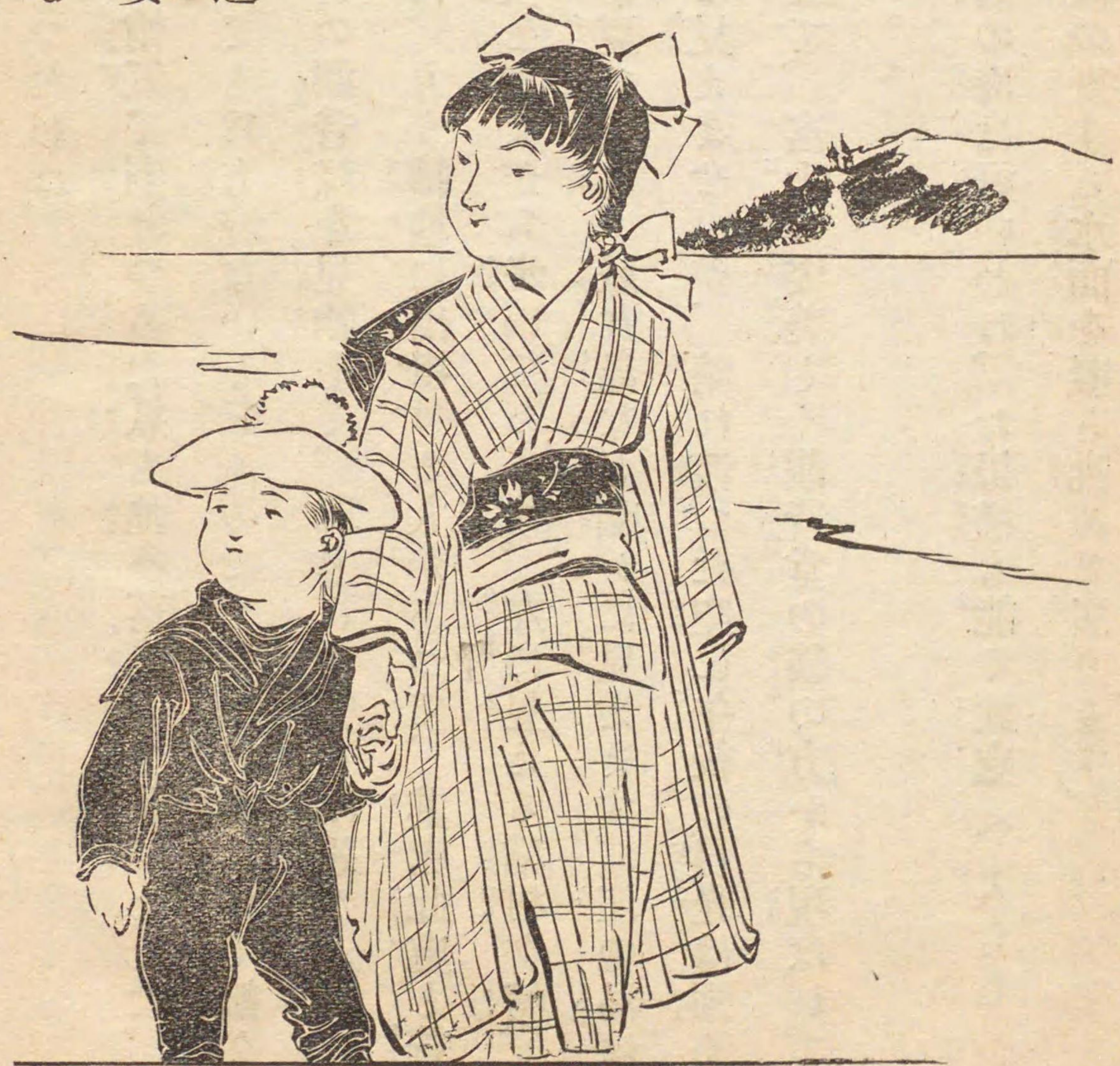
「實眞に弱つて了つたわね。」

二人に大惰氣に惰氣で弱りつめた氣も弛み落膽して了ひました。  
然う泣いて計りゐても爲方がないと云ふので、婆やに誘はれて鶴ヶ  
岡の八幡様や長谷の觀音様を見物して、歸りに由井ヶ濱邊をぶらぶ  
ら散歩致しました。もう轉地に出掛ける人があつて、其處此處と蒼  
い顔の人が深呼吸をしながら歩いてゐます。左に見える稻村ヶ崎、  
遠く海を越えて伊豆の大島、城ヶ島など幽かに見えます。江の島は  
七里ヶ濱に隠れて見えませんが、晴れ渡つた空に午後の日光は強く  
水の上に照り映えて、富士の姿美しく觀音堂の後の方から現はれて  
ゐます。

「何時見ても鎌倉の海は好いわね、お母様も能く此處へ入らしつ  
て？」と穩に小波の寄する水面を凝と眺めて居ります。

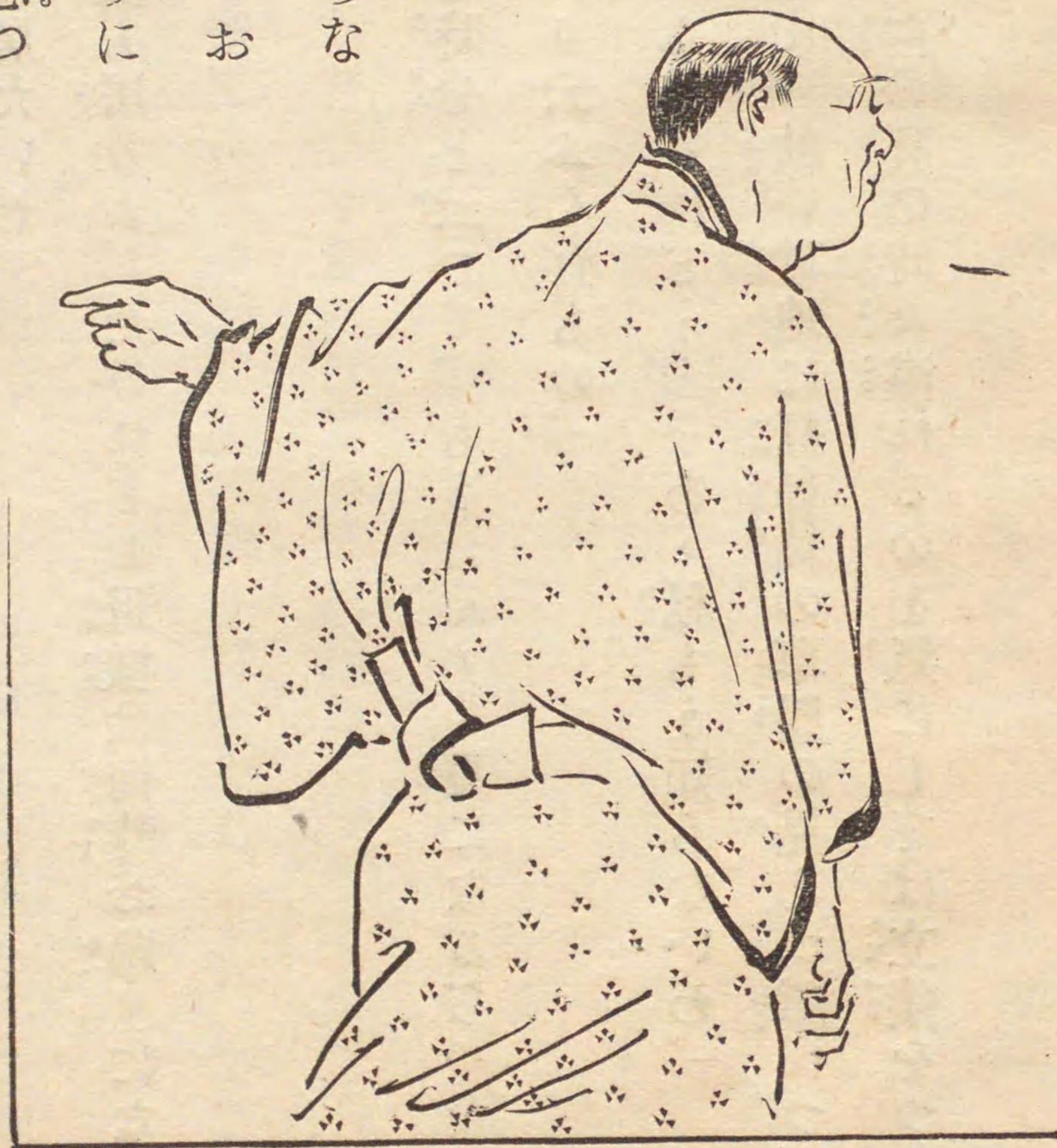


「ハイ、もう始終お越しなさりませ。てござります。そしてはお嬢様も御一緒ならと被仰つて房州へお出でになつた時なぞ大層お悲しみ遊ばして………婆やもつい泣きまし



「てござります。」と  
 年老りは涙脆いもので  
 ですから、雛江  
 さんを慰める積りで  
 居て我身先づ涙を  
 催すのでした。  
 「私は眞實に何も  
 知らなかつたもの  
 だからね、お母様は如何にか  
 お歸りになりたか  
 かつたらうと思つ  
 て……眞實にお察し  
 するわ。」

「旦那様の仰せでは御病後だからとのことでござりますが。」





「あゝ」と頷いたばかり、他は婆やなぞに云ふべきことでないと思つて、口を噤んで了ひました。聴てほつと大息を洩らして、

「私、何時迄も此地に居たいわ。」

「お姉様も居るなら僕も居るよ。たけれどお母様は何時お歸りになるの？」

「私もう知らないわ。」

「お姉様はお花の散る時分と云つて、もうだんく、夏になるぢやないか、ねえ皆僞ばかり云ふんだもの。」

「然ういふ譯ぢやないんだけれど……あゝ私もう知らないわ。」

スタく／＼と先に歩いて、軟い砂地に紅鼻緒の草履の見えつ隠れつ、汐風に裳裾を煽られて白い脛の時々溢れるのを氣にしては立袂をつまみながら振返ると、

「先に行つちや嫌よ。」と駈けて來ます。お母様が被居らなくなつてから殊更お姉様く／＼と云つて慕ふので、可憐らしくも又可愛さが増すのでした。駈けついて手を握ると、

「晋ちゃん、願ひがあるのよ。」と囁く。

「何あに？」

「あのね、お姉様は此頃何か體も悪いし、當分別莊に居たいと思ふから、お迎へが來たら晋ちゃんだけ歸つて頂戴ね、學校もあるし、それに二人とも此地へ來てゐちやお父様に濟まないから、ね、解つて？」

「いやだ、僕一人で歸るのなんか嫌だよ、お母様もお姉様も居ないんだものつまらないや。」

とべそく泣き出します。



「でも、あの叔母様が色々親切にして可愛がつて下さるから、少時の間辛抱して被居い。晋ちゃんも男兒でせう、それ位のことか我慢出来ないやうぢや、後日豪い人になれないわ。」

「だつて彼様叔母様なんか僕いやだ。それぢやね、お姉様と是れから二人で房州へ行かうよ！」

「迎も其様こと出来ないわ、此地迄さへ立川様の叔父様のお蔭でやつと来たんぢやありませんか。」

「ぢや何時になつたらお母様に逢へるの？」

雛江さんは黙つて了ひました。

別荘へ歸ると爺やが息せき駈け寄つて、

「婆さんはまあ何處迄お伴れ申んだい、先刻からお客様での方。」と婆やを睨めて、

「お嬢様、山木様にお春さんがお見えになりました。」と云ふ。

「あら、春やが来たの！」

といふ聲を訊きつけて春やは轉び出で、

「まあ、お嬢様、能う御無事で………眞實に春やは如何に心配致しましたか、何故春やにまで無斷つてお出でになつたかと思ひまして、お怨み申しましてございます。」

「でも春やに云ふと、又お父様に叱られるから氣の毒なもの。」

「電報が参ります迄はお邸宅は大變の騒動でございまして、あの春やはもうお暇になつて了ひました。あゝそれでもお嬢様にお目に懸つてやつと安心致しました。」

「まあお暇になつたの、濟まないわね。」

氣の毒にも可愛想で堪りませんでした。執事の山木は禿げた頭を



へこ／＼下げて、是非今夜お歸りになるやうにと申します。

「私、歸らないことよ。」

「どうか然う被仰らないで、此山木を助けると思召してお歸り下さいませ、でないとお山木はお邸へ歸れなくなりますから、へい。」

「だつて山木は随分よ、お母様が房州へ被行つた時に何故私に知らせて呉れなかつたの、お母様からだつて屹度何とかお言傳があつたに違ひないんだもの。」

「イヤ、どうも恐入ります、實は旦那様のお命令で止むを得ず今日迄申上げませんでした、え、誠に申譯がございません。兎もあれ今夜は一つお歸り下さるやうにお願ひ申上げます。」

雛江さんは黙つて唇をピリ／＼顫はせてゐましたが、此頃少し健康を損ねてゐる處へ餘り精神を使ひ過した爲めに、眩暈がして其場

へ倒れて了ひました。春やは慌て、用意の寶丹などを勧めて蒲團を  
持つて来るやら、婆やが醫者へ走るやらして、一頻り騒ぎました。

「ほんのお疲勞ですから御心配に及びません。」

と云ふ醫者の言葉を聞いて、山木は嫌がる。晋ちやんを勧めて無理に伴れ歸ることに致しました。

「お姉様、では明日屹度お歸りなさいね、屹度よく。」と幾度か耳の傍で囁いて遂に終列車で歸つて行きました。

雛江さんは春やに扶けられて寢床へ入ると、海の音の遠く聞えるなど品川の邸宅にあるやうで、まんぢりともせず、曉方少し眠つて怖い夢に襲はれました。例の叔母様が枕元へ立つて、「明日から私をお母様と被仰い。」と云つたり、「貴女のお母様は最うお歸りになりません。」と威かされたりして思はず知らず大聲を發しました。で、び



つしより汗で濡れた體を拭いて、よろ／＼しながら椽側に茫然立つて屏風山の景色を眺めてゐると、ガラ／＼と門に俥の音が止まりました。

「お嬢様、旦那様でございました。」と訊いて慌て、寢床の中へ潜り込みました。

「雛江、何うした。」と太い聲が聞えます。

「あ、何と云つてお詫びをしたら好からう。」

と小さくなつて居ります。折から襖が開いて、枕元にどしんと大きな圖體を据ゑられる。

「何うした。」

「ハイ。」

「加減は何うぢや。」

それと見ると直ぐ叱られると思ひの外、お優しいのに先づ悲しくなつて。

「お父様、雛江は心にもない親不孝を致しまして、相済みません。」

とびつたりと頭を蒲團につけました。花ならば今が蕾の愛らし盛り、殊にお母様に似て優れた容貌のほんにお雛様のやうだと皆か申すほど、美しい其姿の雨に悩んだ白菊のそれかと擬ふ風情を見て、流石にお父様も愁然となさいました。

「もう可い、解つてる、兎に角今日はお父様と一緒にお歸り。」

「あの、お母様は何時お歸りになるのでございますか？」と恐る恐る訊ねました。

「お母様は肺を患つたのだから當分歸らんぢや、お前達に傳染と大變ぢやないか。」



「傳染つても宜しうございますから、一日もお早くお呼び遊ばして……」云はせも果す、

「馬鹿！」と叱られる。

「お前も普も皆肺病になつて死んで了つたら何うするか。」

「でもお母様

と御一緒な

ら。」と涙を吞

んで、

「私はお母様

がお可愛想で

なりません、

お母様はお父



様や私達のこと

を如何程に思つ

て被居るか知れ

ませんのですか

ら、何卒早くお

呼び遊ばして、

皆に安心させて

戴きたうござい

ます。お父様、雛江が一生のお

願ひでございます。」と啜り上げ

ました。

「お父様の方にも都合があるのだから、其様





ことは小供の心配することでない。まあ今日はお歸り。歸つて充分養生するが可い。」

「お母様がお歸りにならないぢや……………」

「歸らんと云ふのか。」と聲は鋭い。

「それまで何卒此處にお置き遊ばして……………」

「え、剛情な奴め、お前も房州へ行つて了へ！ 其代り徳丸の娘

ぢやないぞツ」

怒りに觸れて荒々しく言ひ放たれました。そして春やにも退れツと被仰つて春やも泣きく歸つて行きました。お父様も其日不快の色を浮べて東京へお歸りになつて了ひました。

九

夏場は賑ふ鎌倉の海岸は人出が盛んになつて、日一日と暑くなり

ました。別荘は相變らず寂として、折々洩るゝヴァイオリンの音やお琴の調の妙なるが聞えるばかり、其後お母様の消息も解らず、本邸からは頓と何の沙汰もありませんでした。

處が土用の暑い最中に偶と山木が晋ちやんを伴れて參りました。

「お姉様、合ひたかつたよ、お姉様は彼れつきりに到頭歸つて來ないんだもの……………」と飛つく。

「學習院もお休みになりましたので、是非お姉様の許へ伴れて行けともう、毎日の仰せでございまして……………」と山木は例のペコく

お叩頭して、何やら心忙しげに、

「あのお嬢様、旦那様は此地へお出でになりませんでございませるか？」と訊きます。

「いゝえ、お父様は晋ちやんが歸つた翌日一度被入つたきりよ。」



「は、あ。」と首を捻つて、「實は一月計り前から御旅行遊ばして被居  
 いますが、其後久らく御消息がございませぬので、邸の方にも色々  
 用件がございますし、え、と……はてな……」と蒼くなつてをり  
 ます。

「あら、お父様はお不在なの、何方へ？」

「最初は九州の方へお越しなされましたのでございしますが、偶とし  
 たら支那あたりへでもお出掛けになりましたかな。」

腕を組んで額からタク／＼流れる汗も構はず考へてゐましたが、  
 聴てそゝくさとして歸つて行きました。

「怪しいね、晋ちゃん、お父様は何う遊ばしたの？」

「あのね、何處かへ行らしちやつたの、僕過日夜獨りで勉強してる  
 とね、お父様が入らしつて、晋、お父様は少時旅行して来るから温

順しくしておいでよ。」つて頭を撫で、そしてお出發になつたの。  
 するとね此頃色々な人が澤山来て、お父様は何處へ被行つたつて訊  
 くんだもの、五月蠅いや。」

「まあ、それで晋ちゃんは其他に何にも知らないの？」

「うむ、何にも知らないけれどね、過日何處かの人が来て此様話を  
 してたよ、お父様は失敗したから逃げたんだつて、僕腹が立つたか  
 ら打つてやらうかと思つたけれど、知らない人だつたから止しちや  
 つたの。」と事もなげに申します。雛江さんは冷りと思ひました。

「まあ。」と唯呆れてゐます。

「そしてね、僕に坊ちゃん、お父様がお歸りにならないと、私等が  
 此邸宅を貰ひますよつて云ふんだもの、それから僕屹度お歸りにな  
 るつて云つてやつたの、そしたらね、早く呼んで被居いつて云ふの。」



「まあ。」  
「だけれど、僕お父様の被居る處を知らないんだもの、お姉様も知らないの？」

「私、なほ知らないわ。」といふ雛江さんの胸には、過日怒つてお歸りになつたお顔が稻妻のやうに閃めきました。屹度何事が起つたのに違ひないと思ふと、さあ心配になつて是迄自分の我儘ばかり通して來たのが、急に濟まなくなつて參りました。然し何處を探さう的もなく、若しや房州とも思つて見ましたが、彼様に嫌つて被居るお母様の許へなんか、御自分から被行らう筈もなし、唯もう不思議に堪えませんでした。

四五日すると不意に見知らぬ男の人達かドヤ／＼と五六人連で別荘へ參りました。爺やに案内させて彼方此方見廻したり、家の中へ

もドサクサ入り込んで、床柱が洒落てるの、茶の湯の間は素敵だのと勝手な評をして、じろ／＼雛江さんと晋ちゃんを凝視ながら、椽側にずらりと並んで、「實に眺望が好いな。」なんて悠々と話し込んで聽て歸りました。

「随分失禮な人達だわね、挨拶もしないで。」

と雛江さんは心に思ひながら、不快な顔して見て居りました、偶と晋ちゃんが云つた言葉を思ひ出して、若しや此別荘をも誰か奪りに來たのではあるまいかと、竦と致しました。

十

暑い／＼は夢の間で、早や涼風の立つ由井ヶ濱邊は何時とはなしに避暑客の影も絶えて、打寄する波の音ばかりは變りなく、初秋の澄み渡つた空に響いてをります。



或月夜に憧憬れて虫の音の涼しく聞える裏庭の四阿に、雛江さんは獨り腰をかけて、お母様やお父様の上を考へてをりました。ソヨ／＼と吹く夜風はネルの袂に軽く靡いて、藁屋根から射す月の光りに眞白の頬のあたりは蒼ざめて艶に見えます。ちよろ／＼と池に落つる噴水の音、果敢なき己が世を啣つ虫のこゑ／＼など、丁度自分を憐れむ呷きかと、染々身に沁み渡るのでした。折から、

「お嬢様！」

と何處からか幽に呼ぶ細い聲が致します。一寸振返つて見ました。が別に何も見えません。

「誰だらう！」と立つて歩みかけると、又、

「お嬢様！」と呼びます。氣味悪くなつて逃げ出しさうに致しましたが、何處か聞き覚えのある聲だと思つて、立停ると、ざわ／＼と

笹の葉摺れの音がして、糸萩の亂れ溢る、道から黒い人影が動き出しました。

「お嬢様！ 春でございます。」と人目を憚るかの如く窈と出て来て、  
「お懐しうございます。」と行成抱き寄せました。夢かとはばかり驚いて。

「オヤ、春やなの、何うして此處へ？」

「さ、お嬢様、今夜是れから直ぐお出立遊ばせ、春がお供を致します。」

「あら、何處へ？ 本邸へかへ？」

「いえ、あの好い處へお伴れ申します、さ、瀛車の時間がございませから直ぐ。春は此處にお待ちして居ります、あの坊ちやまにも窈と然う被仰いまして……大急ぎでございます。」



「あゝ。何が何だか解りませんが、方に思ふ春やの云ふことですから、嬉然して支度も匆々に晋ちやんを伴れて、窃に又裏庭へ忍び出しました。」

「さ、被入いまし。」

三人の姿は夢のやうに消え失せました。鎌倉の夜は何處までも静かでありす。

二時間計り経つて、月は高く中天に懸つた頃、上り列車は大森の停車場で停まりました。十二三人計り下りた中に雛江さんの一行が慥に見えました。瀛車は煙りを残して轟と去ると、三人の影は八景園に向つて居ります。石段を上つて、唯ある小さい門の前へ來ると、「さ、此方でございます。」と春やは先に立つて二人を中へ入れ、門を堅く鎖しました。家からは直ぐ灯がさして玉ボヤの洋燈片手に、

玄關に現はれた丸鬚の美しい其よ!

「アラ……お母様!」

「お母様だあ。」

それと見るや駈け寄つて、夢中に二人は取絶りました。

「オ、能く歸つて呉れましたね。」

確固抱いて、はらくと熱い涙は瀧のやうに頸元へ注がれる。

「會ひたかつたわね、お母様!」

「お母様あ……」 聲一杯出します。

「眞實に久らくだつたね、お母様も如何に會ひたかつたでせう!」

「もう……もう何處へも被居つちや嫌よ!」

「お母様は何うして房州へ行らしたの?」

「行きません、もう決して二人の傍を放れないの、ね、二人はお母



様の子ですもの……」

「彼様叔母さんなんか

嫌だわね。」

「お母様は黙つて

涙をお拭きになり

ました。」

「さ、お父様に御

挨拶なさい。」

と奥へ導かれると、

思ひきや、お父様は厚

い蒲團の上に長々と横

はつて被居いました。



「お父様、御機嫌よ

う！」

「お父様、御機嫌よ

う！」

「ちやんと枕元に

坐つてお叩頭する

「能く歸つて来た

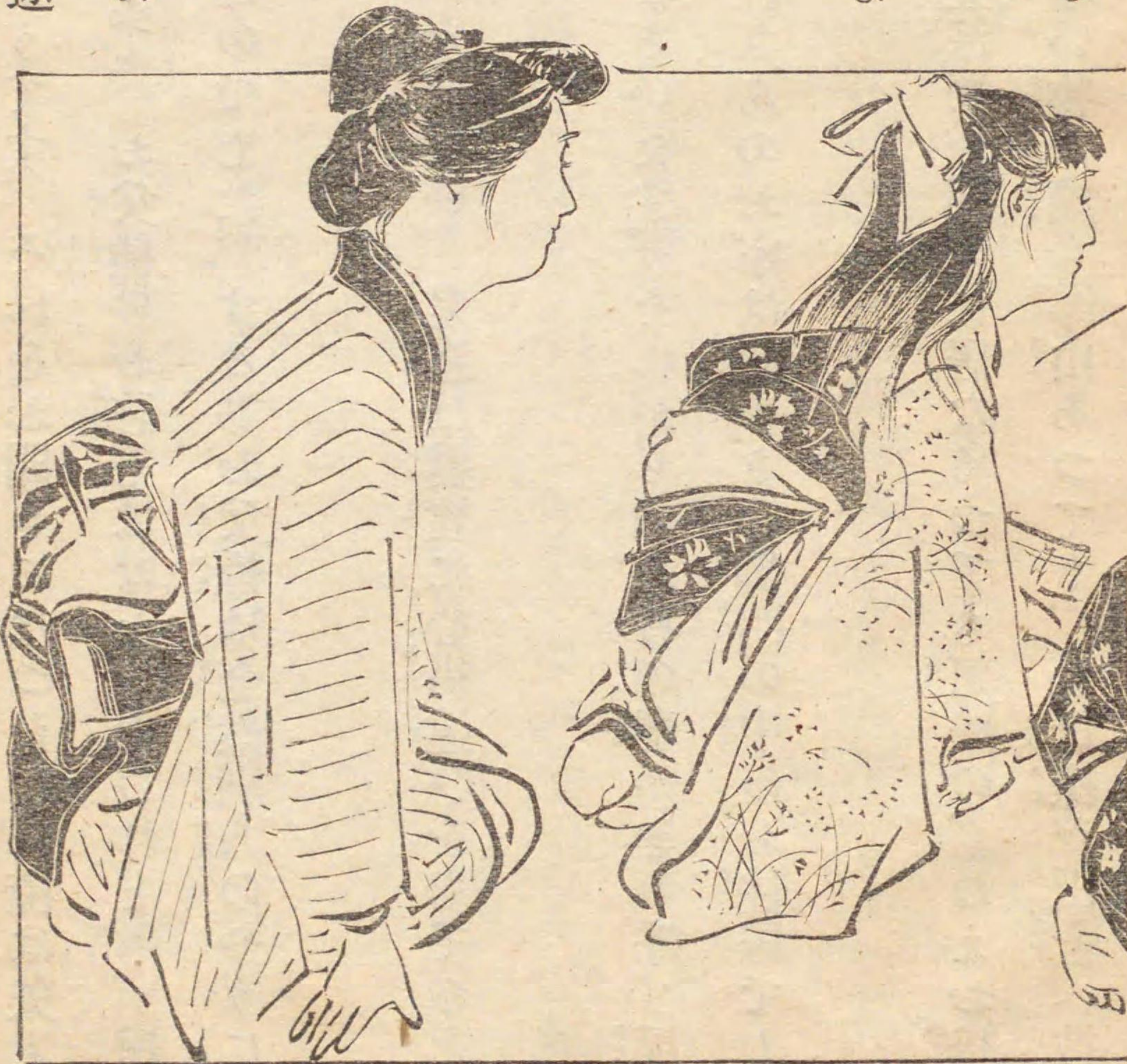
もう安心するが可

いぞ。」

と手を伸して二人の

手を握られました。途

端に涙がハラリと頬を傳はりました。





お父様は事業の失敗から激しい脳病をお患ひになつて、脳病院へお入りになつたのださうです。それをお聞きになつたお母様は矢も楯も堪らず心配になつて、お父様のお許しはなかつたけれども、房州から看護に被入つたのでした。するとお父様は全然別人のやうにお變りになつてゐて。

「お前のやうな優しい女はない。是迄は眞實に心得違ひをしてゐた、堪忍して呉れ！」

と被仰つたそうでございます。それから忠義者の春やをお呼び戻しになつて、當分雛江さんのお家は此小さい御門の中のお住居でした。

「私、御殿山の彼様立派なお邸宅に居なくつても可いの、ねえお母様、綺麗な衣服や美味しい物が幾ら澤山あつても、お母様が田舎へ被

行つて了つたり、嫌な叔母さんが來たりするよりも、お家は小さくつても斯うやつてお父様からお母様から御一緒で、面白く暮した方が好いわね、然うしたらお母様だつて御病氣にもならないし、叔母様も來ないわね。」

お母様は餘りの可愛さに抱き締めて涙に咽んで被居いました。

「彼叔母さんは急に何處かへ行つて了つたさうですから、もう安心ですよ。是れでお父様の御病氣さへお恢復になれば、何も心配はありません。」

優しいお母様と雛江さんの手厚い看護と、誠心ある温かい慰藉とに依つて、お父様の御病氣は宛然薄紙を剥す如に、だんく癒つて行きました。

霜枯れの散る木の葉にも哀れ深き世と人は嘆くを、雛江さんのお



家では目出度お父様の恢復祝ひがありました。越えて一月計り旅行  
なさいました。間もなく運氣は再び廻つて、一旦は人手に渡つた  
本邸も別荘も、又舊の通りに戻つて引移りました。

事件多かつた年は改まつて、新しい初春の光りは再度御殿山の本  
邸に輝きました。浮きつ沈みつ人の世の様は廻れば變るならひで、  
庭に來てなく鶯の音も長閑に、一家の榮え、家内の安全、清い家庭  
に吹く風は暖かく、春は花咲く御殿櫻の今年は更に一入の眺めでお  
母様の御満足雛江さんのお悦びは何に譬へんやうもなく、朝も夕も  
盡さぬ歡樂に充ちました。

(完)

明治四十二年五月廿一日印刷  
明治四十二年五月廿四日發行

定價金貳拾錢

著者 尾島菊子

發行兼者 金港堂書籍株式會社  
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者社長 原亮三郎

印刷所 凸版印刷株式會社  
東京市下谷區二長町一番地

少女小説  
不許  
複製  
御殿櫻

發賣所

東京市日本橋區  
本町三丁目

振替貯金口座  
八八一五番

金港堂書籍株式會社



260  
114

新 作 少 女 小 說

神谷  
伴作  
鶴

み  
な  
し  
兒

定價  
金貳拾錢  
郵稅  
金四錢

神谷  
伴作  
鶴

相  
思  
鳥

定價  
金貳拾錢  
郵稅  
金四錢

米光  
月光  
關

島  
の  
少  
女

定價  
金貳拾錢  
郵稅  
金四錢

保村  
保作  
一

娘  
浦  
島

定價  
金貳拾錢  
郵稅  
金四錢

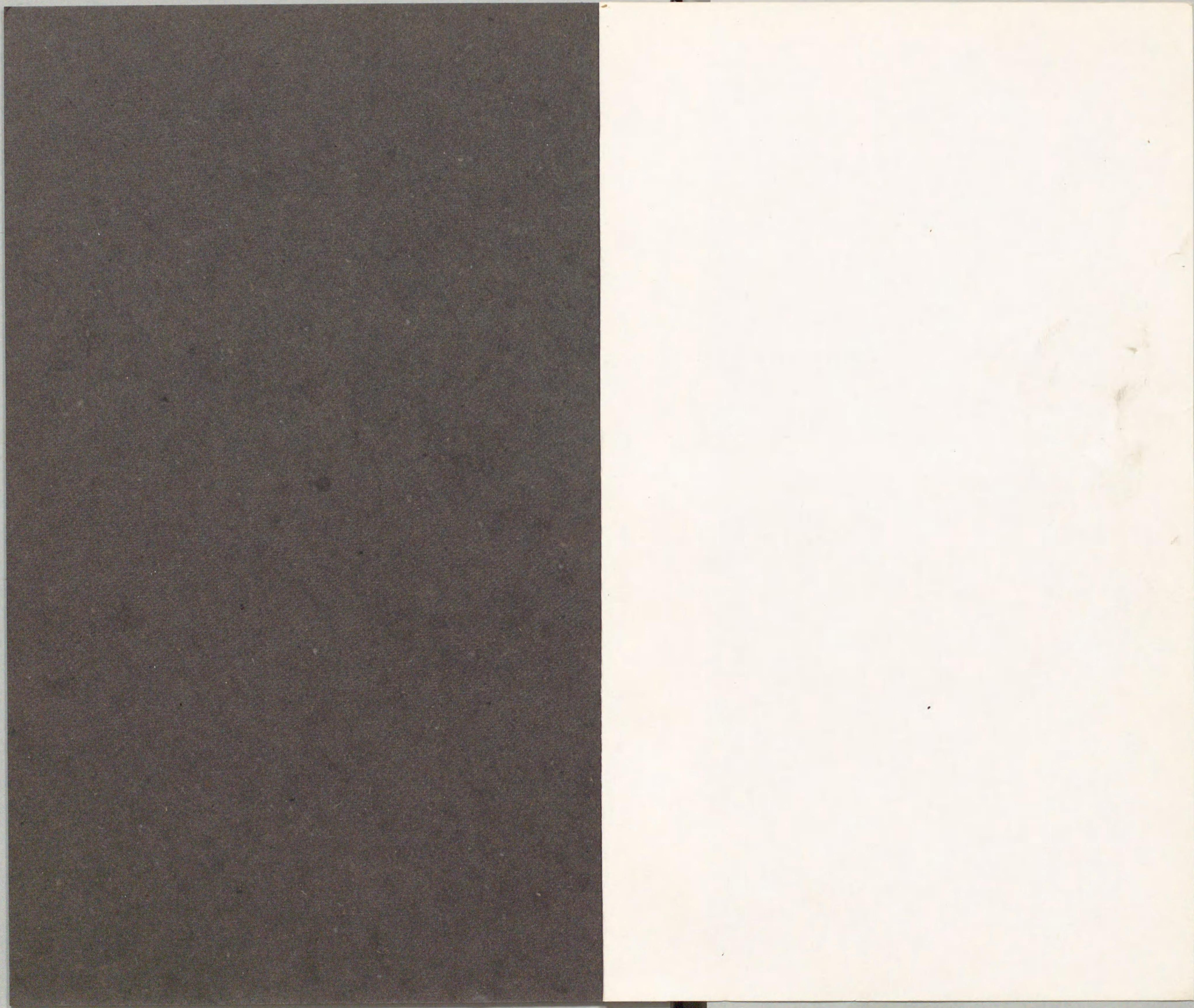


東京

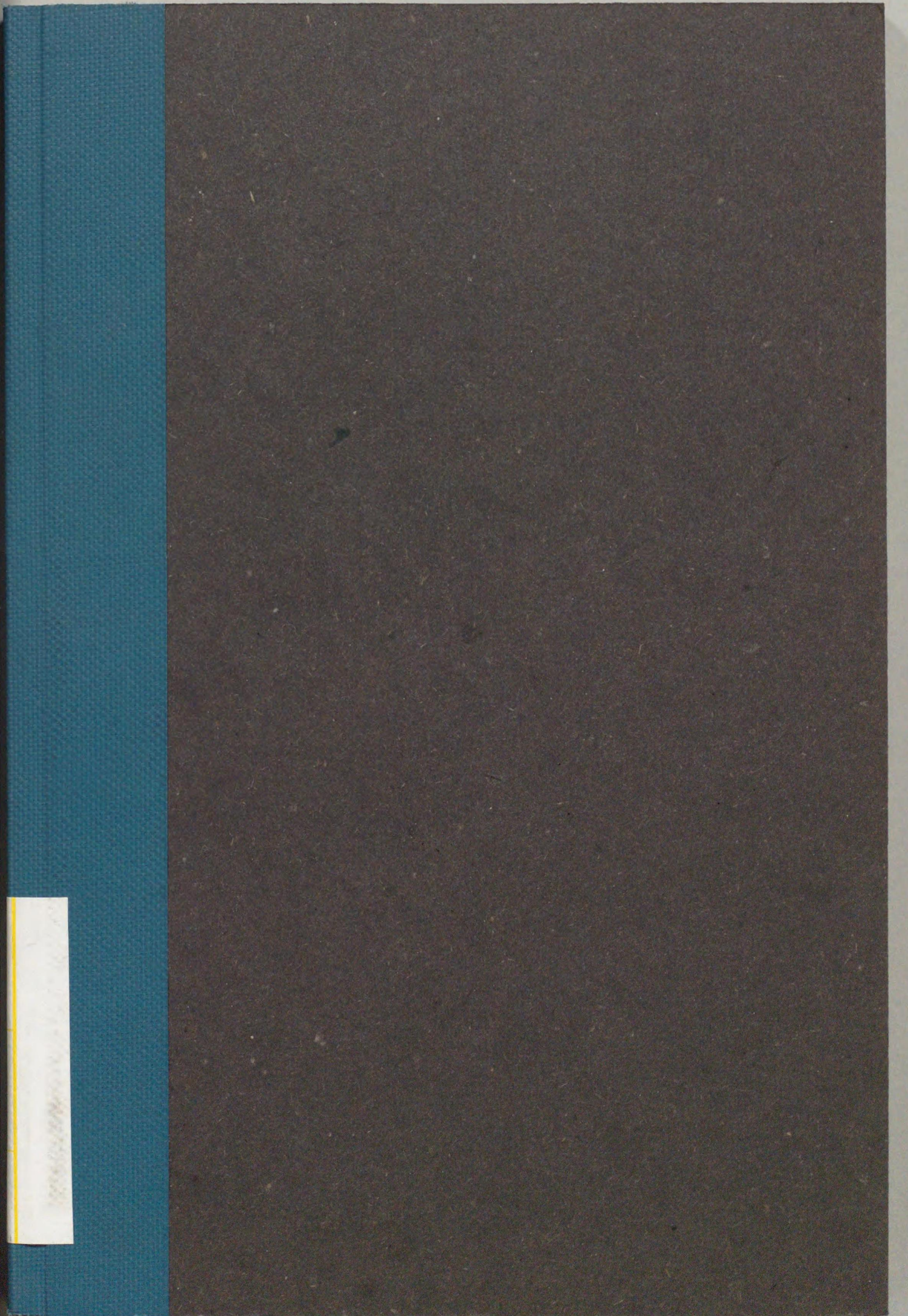
金港寺  
後川











1800-1850  
1800-1850  
1800-1850